

江別市体協三十年の歩み



江別市体積三十年の歩み



## 目

## 次

体協 30 年を想う	江別市体育協会々長	岩田 政勝	2
創立 30 周年を祝して	財団法人北海道体育協会々長	地崎宇三郎	3
お祝いのことば	江別市長	山田 利雄	4
	江別市教育長	伊藤 貢	5
『特別寄稿』			
江別体協 30 周年を迎えて	江別市体育協会副会長	佐野 猛	6
体協事務局の思い出	江別市体育協会監事	池田 春男	7
江別市体育協会 小史			8
単位団体の歩み			
江別相撲連盟			17
江別陸上競技協会			18
江別野球連盟			19
江別卓球連盟			21
江別弓道連盟			22
江別バレーボール協会			28
江別バドミントン協会			24
江別剣道連盟			26
江別柔道連盟			27
江別スキー連盟			28
江別空手道連盟			29
江別水泳協会			30
江別バスケットボール協会			31
江別軟式庭球連盟			32
江別市体育協会創立 30 年記念座談会			34
栄誉に輝く人々			41
江別市体育協会歴代役員			44
江別市体育協会役員（昭和 55 年度）			46
市内体育施設の現況			47
〈規約・規程〉			
江別市体育協会規約			50
江別市体育協会加盟団体規程			52
江別市体育協会事務局規程			52
江別市体育協会表彰規程			53
記念事業実行委員			54
編集後記			55



## 体協三十年を想う

江別市体育協会々長 岩田政勝

当協会の創立三十周年を迎えまことに感慨深いものがあります。

昭和二十年と二十五年と言えば、国家の総力を挙げて戦った空前の世界大戦の結末が、惨憺たる敗戦となり、わが国は政治も経済も社会秩序も未曾有の混乱に陥り、一億国民は窮乏失意の極、全く虚脱状態に在った時です。この混乱と失望の闇黒の中に日本再建の決意を促がす炬火をかかげ、国民の士気を鼓舞せんとして始められたのが、昭和二十一年の第一回国民体育大会であったことを忘れられません。国体は今年で第三十五回を終え、国力伸展の精神的、肉体的基盤の育成に貢献していることはたのもしき限りであります。

江別もこの三十年間に町から市になり、人口も三万一千から八万五千となり、競技団体もそれぞれ拡大充実し、体育施設も面目を一新して、夫々の利用状況も目を見張るものがあります。

当協会三十年の足跡を顧りみ、現状を視るとき、創立以来傘下団体の育成強化のために幾多の犠牲を払いつつ、熱心に奉仕活動をつづけて来られた多くの先輩、同僚の諸君の労苦に対し、心から敬意と感謝を捧げると共に、この式典が今後の協会発展への力強いスタート台になることをお願いいたします。今こそ、今後どうしたら市民の日常生活の中に、もっといろいろなスポーツを定着させ、市民生活を更に明るく、健康なものとし、お互いの連帯意識を深め、道徳的、文化的水準を高めることができるかを真剣に考えるべき大事な「とき」であると思えます。

そこで、先ず協会自身の内部体制の整備、体質の強化を実現し、市、市民、協会の三者が一体となり、確信と信頼と協力のもとに、しつかりした指導性を発揮して協会の事業がたのしく、正しく、力強く発展することを祈念して止みません。



## 創立三十周年を祝して

財団法人 北海道体育協会

会長 地崎 宇三郎

母なる石狩川を踏まえ、尊い開拓の血を引き継いで、発展の一途をたどる江別市民の体育・スポーツを、行政と協力しながら今日の隆盛にまで育成された、江別市体育協会が、創立三十周年の光輝ある年を迎えられたことに対し、心からお喜びを申し上げます。

終戦の虚脱状態の中から、当時の江別町民が体育・スポーツを通して、地域住民自身の手による交流・団結・体力づくり立ち上がり、愛好家の手によって、陸上競技・野球・庭球・卓球・排球・柔道・相撲・自転車等の種目別団体をつくり、やがて昭和二十五年には与論の高まりが結実して、江別体育連盟が発足されたとお聞きしております。

現在、北海道体育協会並びに石狩管内各体育協会の中で重鎮的存在である江別市体育協会の今日を思う時、当時創立にあたられた関係各位の決断と熱意に深く敬意を表わすとともに、そのご努力に対し厚く感謝を申し上げます。

今や「道民皆スポーツ」は単なるキャッチフレーズではなく、完全に実践のルールに乗って前進しつつある現状から、市町村体育協会の責務はますます重要性を増すこととなります。この意味からも、江別市体育協会がその基本姿勢として、選手養成のみに偏らず、体育・スポーツの大衆化と、愛好者の拡大を目標としておられることは、目標と実践の一体化という点でまことに本質をついた日常活動として高く評価されているところであります。

いよいよ第四十四回国民体育大会北海道開催の準備も急ピッチに始動の時、価値ある歴史と、力強い実践力をもつ江別体育協会の今後のご活躍と、ますますのご発展をご期待申し上げてお祝いの言葉といたします。



## お祝いのことば

江別市長 山田利雄

江別市体育協会創立三十周年を心からお祝い申しあげます。

一口に三十年と申ししましても昭和二十五年当時の社会状況は、戦後の混乱な時代の中にあり、諸物資不足し、人々の心はスポーツよりも毎日の生活に追われる日々であったことと思われませんが、有意の熱心な皆さんの並々ならぬご努力の結実が、今日の三十周年につながることを考えますとき、行政を担当する者といたしまして、関係各位に対し、深甚なる感謝の意を表するものでございます。

スポーツの振興は、市民のふれあい、健康の増進、余暇の有効活用など、市民生活の中で大きな役割を果たしております。スポーツの振興を図るためには、行政としての対応も必要ではありますが、基本的には、市民のスポーツに対する意識の高揚とスポーツ指導者の養成、さらには各競技別の単位団体の自主的活動をはじめ、これらを統括する体育協会の自主、自立の活動が大きな柱となっております。

体育協会創立以来三十年を経過した今、スポーツは各単位団体はもとより、多くのボランティアの方々のご努力により、市民生活に浸透してまいりましたが、今後もスポーツ機会の拡大、指導体制の強化、施設の拡充など残された課題は山積しておりますので、体育協会と行政とが一体となって精力的にスポーツ振興に取り組むことが肝要であるかと考えます。

ときあたかも、昭和六十四年の国民体育大会が北海道に決定し、そのメイン会場ともなります道立総合運動公園が関係各位のご尽力により江別市に設置されますことは、今後の江別スポーツ界にとって大きな夢と希望をもたらし、スポーツ振興に多大な貢献をなすものと確信するものであります。これらを踏え江別市体育協会が三十年を契機として、今後ますます発展し、大きく飛翔することを心からご期待申しあげ、協会役員各位のご活躍を祈念し、ごあいさついたします。





## お祝いのことば

江別市教育長 伊藤 貢

江別市体育協会創立三十周年誠にありがとうございます。心からお祝い申しあげます。

体育協会発足の昭和二十五年は、人々が戦後の疲弊と混乱から脱却してようやく立ちあがり始めたとはいいながら、生活条件は依然として不備であり不十分な時期でありました。こうした中での設立には幾多の困難が伴ったと思われませんが、その困難を克服してから今日まで、体育協会は江別市の体育、スポーツの推進向上に多大の足跡を残してまいりました。

体協は発足以来、スポーツ人口の拡大と組織の充実にとり組んでまいりました。その結果、構成団体は今や十五団体、構成員も実に六千人に及んでおりますが、それとともに単位団体の活動も活発となり、道民スポーツ大会をはじめ各種大会に積極的に参加して活躍をはかり、また体協の総合的、集約的大会であります市民体育大会は、本年度で二十七回を数えておりますが、このことは、構成団体のスポーツを育て組織を育てようとする熱意の表われであり、誠に心強さを感じます。さらには、こうした体協自体の活動ばかりでなく、スポーツ少年団の育成にも尽力し、スポーツの指導と、それを通じて青少年の健全な育成をはかり、また、近くは道立総合運動公園の誘致など各種体育施設の整備拡充に努力するなど、江別市体育協会は文字どおり質量ともに充実、前進の一途をたどって今日に到りました。江別市体育協会が、これらの活動をとおして、市民の体育、スポーツに対する関心を高め、健康増進をはかるとともに江別市の体育、スポーツの振興に果たした役割と業績は、今日高く評価されております。三十年に亘ります関係者の方々のご苦勞ご協力に深甚の敬意と感謝を申しあげます。

体育、スポーツは、心身の発達と豊かな人間性を培い、私たちの日常生活に活力とうるおいを与え、健康で文化的な生活の基盤となるものであります。体育協会に対する市民の期待はますます高まり、果す役割もまた大きくなっていくものと思われれます。

江別市体育協会がこの輝かしい三十周年を契機として、一層充実発展されますことを心からご祈念申しあげまして、お祝のご挨拶といたします。



Ⅱ 特別寄稿 Ⅱ

## 江別体協三十周年を迎えて

江別市体育協会副会長 佐野 猛

江別市体育協会の結成三十周年記念の年を迎えて、往時を思い出し、誠に感慨無量なものがありますとともに、心からおめでとうと申しあげます。

江別体協のそもそもの発足は昭和二十三年五月にさかのぼります。当時はまだ正式にまとまった団体の集合体ではありませんでしたが、地域の団体として「野幌体育連盟」という名称のもとに第一歩をふみ出したのが始まりでありました。

翌二十四年五月に江別陸上競技連盟が創立されました。そして翌二十五年に、陸上競技・庭球・卓球・野球・自転車・柔道・相撲の八部門に呼びかけ、全面的賛同を得て「江別体育連盟」を結成致しました。

当時の古田島町長さん、後藤助役さん、そして荒井教育長さんなど、市の主だった人々が、スポーツに大変理解を示してくださいまして、町民の体育向上の一環として、現飛鳥山公園敷地に一周四百米の陸上競技場をつくってください、当時まだ若かった私などは心から感激したものでした。今でも当時の嬉しかった気持ちをよく覚えております。

そして同時に野球場の整備やテニスコートの造成などに力をつくしてくれました。私どもは江別体育連盟の発展に力をつくそうと契い合ったのです。

六十三年夏までに、待望の総合運動公園が江別に設置決定、六十四年国体目指して施設整備が急がれるわけですが、江別体協としても喜びにたえないところですが、決意を新たにしなければなりません。

光陰矢の如し、体協結成から早や三十年。体協は市の発展とともに、立派に大きく育ちました。発足以来の代々の役員さんのご苦労とご努力に深甚の敬意をほらい感謝申し上げますとともに、三十年を契機として、益々体協が充実し、今後一層の発展を心から祈念するものであります。

江別市体育協会創立三十周年おめでとうございます。



|| 特別寄稿 ||

## 体協事務局の思い出

江別市体育協会監事 池田春男

戦後の混乱した社会情勢の中から幾多の苦難を乗り越えて、昭和二十五年江別市体育協会が設立され、三十年と言ふ節を迎え意義ある記念誌が発行されますことを、志を同じくする諸先輩の方々と共に祝福しあえることは、感慨無量のものがあります。

顧りみまずと昭和二十五年から三十五年までの十年間の体育協会については、創草期でもあり、佐野副会長からお話しを聞いたたびに、当時のご苦労に対し頭が下がるばかりであります。

私は、昭和三十六年から今日まで体育協会の運営に参画してきましたが、回顧してみますと一口で運営基盤、即ち財政、事業、体制の強化と整備の時代であったと思います。私が昭和四十三年から四十九年まで事務局長を担当したときは、事務局体制を教育委員会依存から主体性をもつよう指導され、体制の整備、予算枠の拡大、事業内容の充実に努めた時代であり、また、昭和三十九年の東京オリンピックに影響され、スポーツ人口の増加と底辺の拡大が推進されたときでもあります。ママさんバレー、スポーツ少年団を体協傘下に組織化し、育成経費を助成し、団の指導員確保と発掘に苦慮した時代でもありました。さらに、体協組織の拡充を図るため、昭和四十五年から四十六年には、相撲・水泳・スケートの各連盟が組織され体協に加盟されました。特にスケートは、リンクが昭和四十年代初期には江別方面一カ所で運営されておりましたが、これを機にスケート人口が増加し、江別・野幌・大麻の三地区に設置され、市民の冬のスポーツとして普及しました。また、施設面では、飛鳥山運動公園にバレー、テニスコートの設置要望があり実現を見ましたが、バレーボールは屋外から屋内スポーツに変り、造成されたコートはすべてテニスコートとして使用されたのが当時の実態でもありました。このほか市民体育館の建設では、協会が中心に署名運動を行い、昭和五十三年に開基百年記念事業として待望の完成を見ております。

今後は、六十四年の北海道国体を目指し道立総合運動公園の建設、体協の体制・組織・財政の強化を更に進め、協会の一大飛躍を目指し一層精進されることを祈念して止みません。

# 江別市体育協会 小史

## 設立前期

江別市体育協会の歴史は、昭和二十五年にさかのぼる。勿論その前から体育関係の種目別団体が愛好家によって結成されていたし、当然のことながら種目別の競技大会も、独自に開催されていたわけである。また、市民の各層が参加しての陸上競技選手権大会も催されてもいた。協会設立以前の競技団体としては

陸上競技・野球・庭球・卓球・排球・柔道・相撲・自転車の八団体があり、夫々活動していた。

北海道体育協会が設立されたのは昭和七年であって、以後競技種目別の加盟による統合体として戦後まで経過してきたが、昭和二十三年には、地方団体として札幌市体育連盟をはじめ十一団体が、地方自治体の連盟として加盟しているが、江別市が顔を出すのは、設立後十七年を経過して昭和四十二年になる。

さて、当時はまだ市制施行以前のことだから「江別町」ということになるが、昭和二十五年四月二十六日、町内各競技団体はかねてから与論の高まりをみせていた大同団結の時期をこの日に設定し、「江別体育連盟」を発足させた。加盟・団体・各代表が一堂に会して連盟の結成を祝し、会則の決定・役員の選出等を行った。

創立当初の役員は次の各氏である。

会長 岩田政勝

副会長 福本重亀・三浦光三・江草信道

理事長 佐野猛

こうして目度く発足した連盟（当初は協会の名称は使っていない）であるが、早速創立を記念しての各競技大会が催されている。以下年譜として経過を記すことにする。

軌跡

昭和23・7・31 飛鳥山野球場完成

25・4・26 江別体育連盟創立

#・9・ 第一回町民体育大会開催

29・7・ 市制施行により「江別市体育協会」と名称変更

30・7・31 飛鳥山陸上競技場完成

35・8・ 弓道連盟加盟

昭和37	41	42	43	44	46	48	49	50	51	52	53	54	55	56
6	3	10	5	5	4	4	7	7	2	4	4	3	8	11
6	3	15	30	15	25	1	20	21	8	13	28	11	30	31

- バドミントン協会加盟
- スポーツ少年団育成部設置
- 北海道体育協会に加盟
- 飛鳥山テニスコート・バレーコート完成
- 協会々々に表彰規定を設け、過去の功労者に対し一括して表彰
- スケート連盟加盟（現在活動休止）
- 水泳連盟・相撲連盟加盟
- 第二回道民スポーツ石狩夏季大会開催
- バスケットボール協会加盟
- 青年センター完成
- スポーツ少年団育成部加盟（50年まで以後独立）
- 第六回道民スポーツ石狩夏季大会開催
- スポーツ振興基金設置
- 第一回江別市ロードレース開催
- 第一回ウインタースポーツデー開催
- スキー連盟加盟
- 第九回道民スポーツ石狩夏季大会開催
- 空手道連盟加盟
- 江別市民体育館完成オープン
- 大麻体育館完成オープン
- 体協だより創刊号発行
- 庭球協会（硬式）加盟
- 第12回道民スポーツ石狩夏季大会開催
- 江別市体育協会創立30周年記念式・祝賀会挙行

昭和二十五年創立以来ここに三十年。加盟団体も十五団体を数えるに至り、文字どおり江別全市を網羅する体育協会にまで発展したその背景には、歴代の役員が積極的な活動もさること乍ら、スポーツの振興を大きな柱として全面的に支援してくれている市当局、更らに夫々の立場から理解を示してくれる関係機関団体、そして何よりもスポーツを愛し、市民のスポーツ活動と指導に献身する多くの人達。これらの大きな輪がもたらしたものが今日の体育協会の姿であることを心に銘じ、今後の一層の発展を期するものである。

# 単位団体の歩み



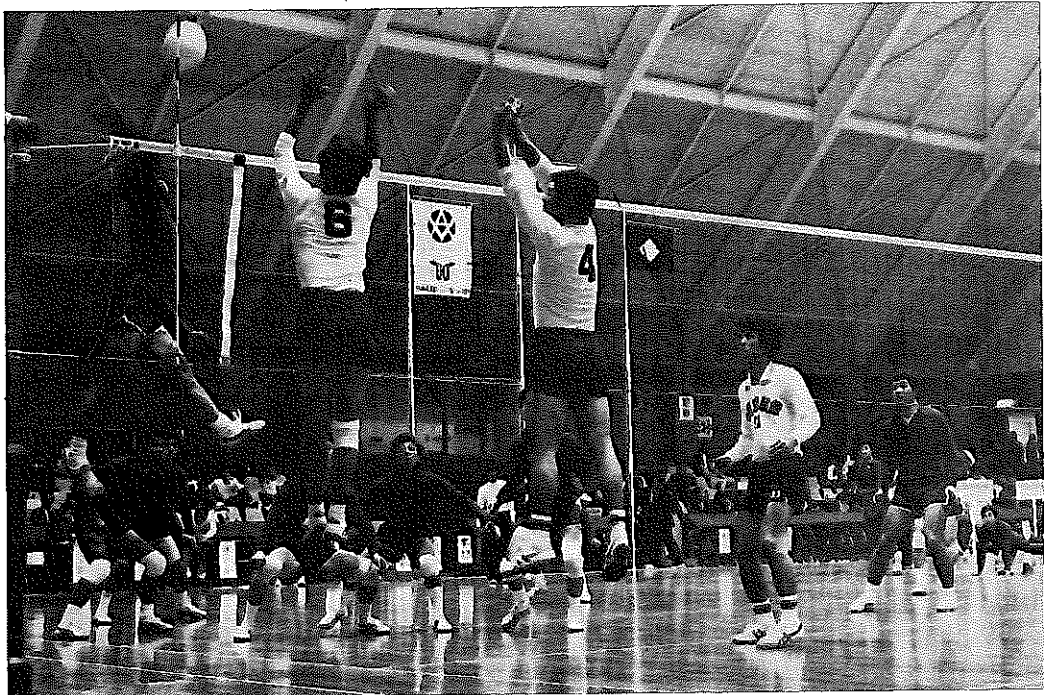
市民マラソンスタート風景（陸上競技場）

道民スポーツ石狩夏季大会



陸上競技協会

バレーボール協会



9人制バレーボール

道民スポーツ石狩冬季大会

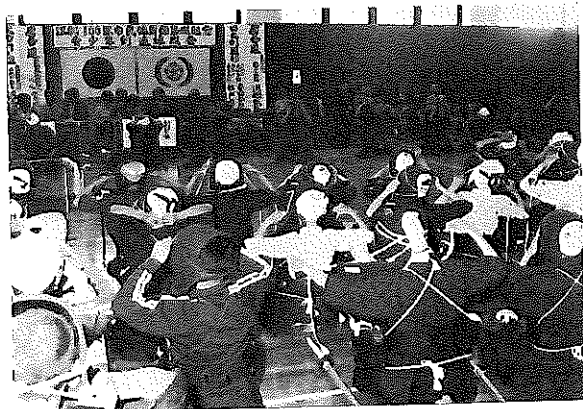


歩くスキー（原始林）

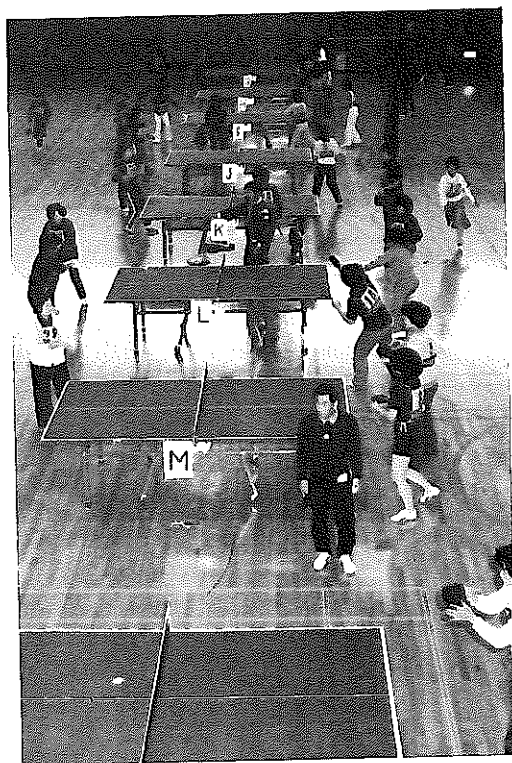
ス キ ー 連 盟

剣道連盟

卓球連盟



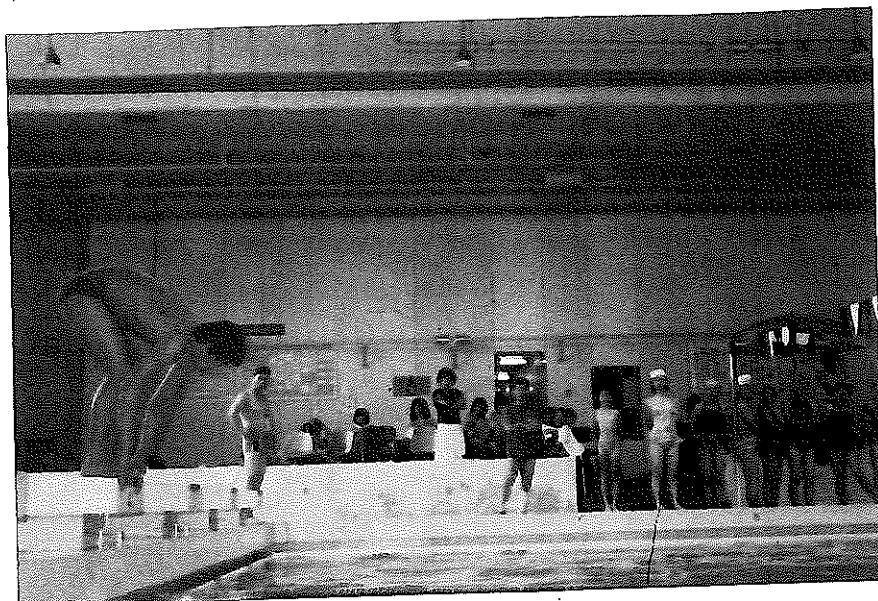
100年記念青少年練成会



市民卓球教室（市民体育館）

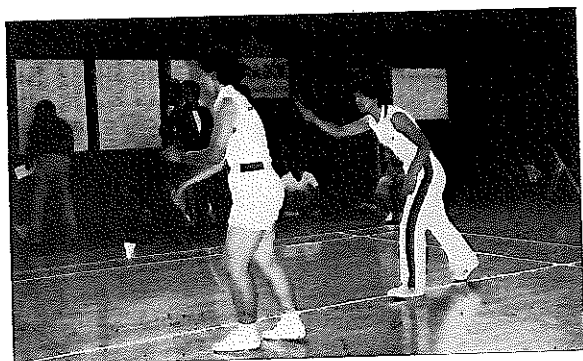


記録に挑む  
(青年センター)



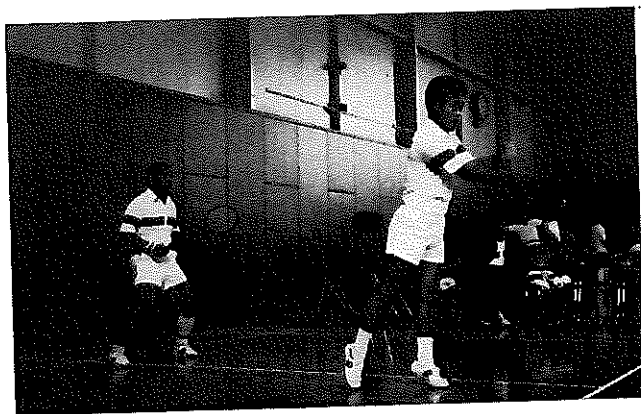
水 泳 協 会

バドミントン協会



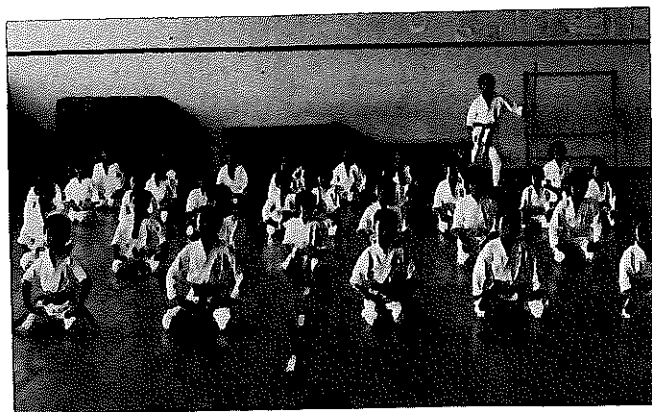
ママさんバドミントン(大麻体育館)

道民スポーツ  
石狩夏季大会



気合いを入れて“エイ”

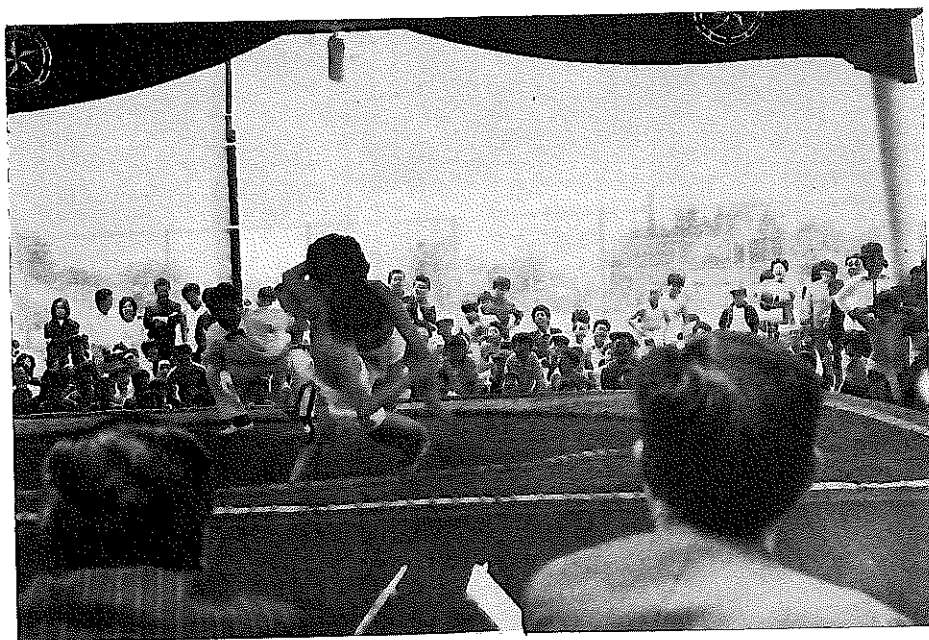
(審査会風景)  
市民体育館



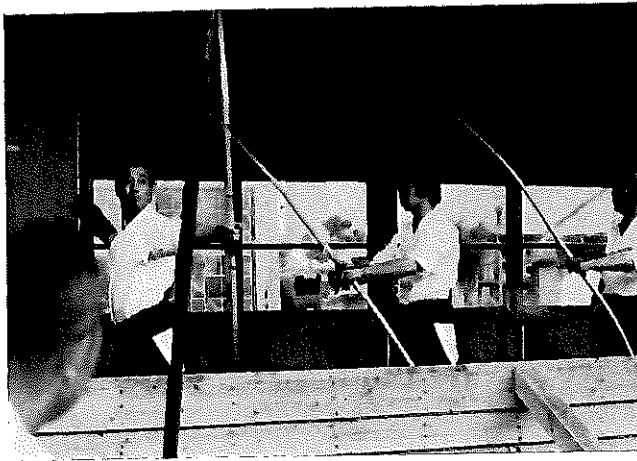
精神統一  
“ウーン しびれてきた”

空手道連盟

相撲連盟



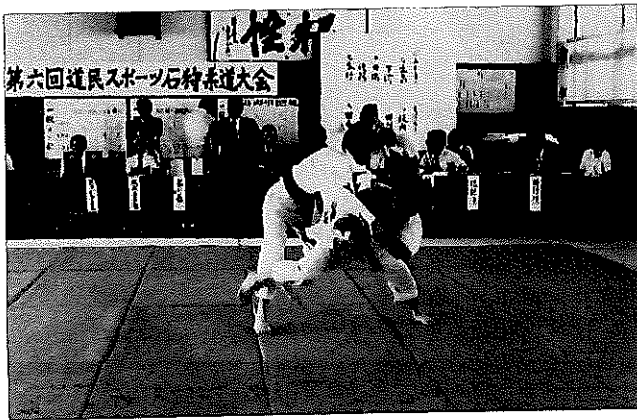
内掛け決る(市民体育館 相撲場)



見事的中  
(道民スポーツ石狩夏季大会)

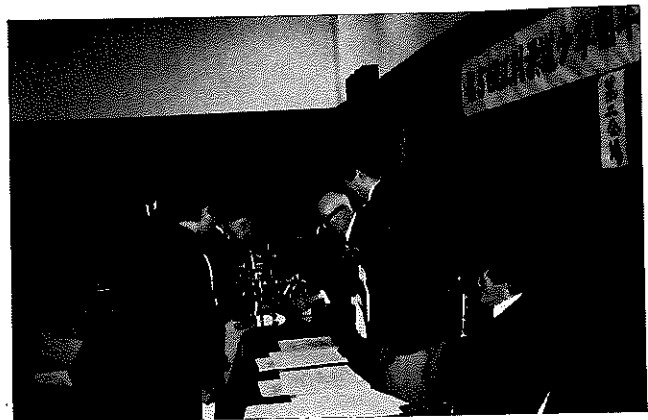
弓道連盟

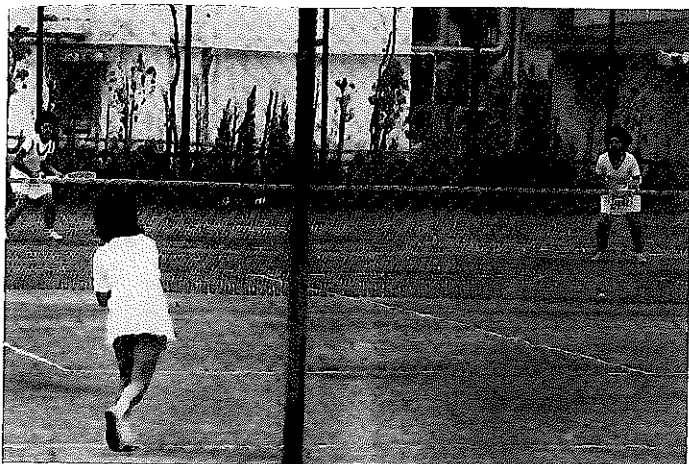
柔道連盟



熱戦 (道民スポーツ石狩夏季大会)

少年団卒業記念大会表彰式  
(市民体育館 柔剣道室)





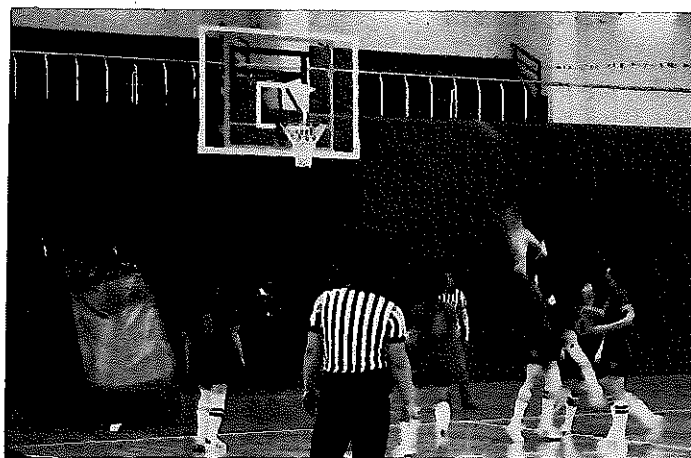
ママさんの朝練習

軟式庭球連盟  
バスケットボール協会

野  
球  
連  
盟



一球入魂



練習風景 (市民体育館)

## 江別相撲連盟

江別市の相撲歴史を記録としてみることでできるのは昭和十年以後からである。駅前の龍門旅館経営者大井勝蔵氏を中心に市内の同好者が集まり、「江別相撲同好会」を結成したのがその最初であった。輝やかしい相撲史の創設当時の先達の名を特に列記しておく。

江別地区 大井勝蔵(会長) 松尾・金内・阿部・本山・清水

野幌地区 水野・川上・萩野・遠藤・中村

王子製紙 伊藤・佐藤・前田・渡部

北海電力 八重樫・西川・甲斐・鹿内・沢村

昭和十四年四月に役員を改選し、二代会長に石井勝・副会長兼理事長に清水重雄を選任するとともに、会の名称を「江別国技会」に変更。

昭和二十三年の役員改選で三代会長に三浦光三・副会長に清水重雄を選任し、未だ戦後の混乱期であったが東京大相撲をよぶ大事業を成しとげ、相撲熱をたかめ後輩の指導育成に力をつくした。

昭和二十七年に四代会会長清水重雄・副会長渡部武司・金内与四美・理事長に高柳武治を選任し、大相撲佐賀の花一行を招いて相撲道の振興に役立てた。

この頃はいわゆる戦後の復興期に入り、各役員とも働き盛りの年代でもあり、本業に精魂を傾けねばならない時期であって、好きな相撲を忘れたわけではないが、江別相撲界にとつては、しばらくの間空白期のような時期が続いている。ようやく社会的に、また個人的にも安定とゆとりが感じられるようになった年代に入って昭和四十五年、改めて江別相撲界の建て直しがはかられ、四月に「江別相撲連盟」として再発足。規約もつくられ、正式に道相撲連盟に登録し、江別体育協会にも加入した。会長に清水重雄・副会長高柳武治・理事長辻田武作(機農高校教諭)を選出し、技術講習・審判講習や役員の新進育成に力をつくすなど、再興に精力的な活動をした。また昭和三十年頃の台風で破損し、取り除かれてそのままになっていた江別神社の土俵の屋根とともに四本柱・土盛などについても石川外三氏の努力で改修築された。

昭和五十一年に役員改選を行い、会長土蔵辰馬・副会長高柳武治・石

川外三・理事長に中山満を選出した。

昭和五十三年度の総会に於いて役員を改選するとともに、名誉会長・顧問制を新設して今日に到っている。役員氏名後掲、連盟の略歴は以上のとおりだが、その長い歴史の中から特に目につく事をいくつか挙げてみると、

昭和十二年全道選手権大会で清水重雄君が厚田の池田君(後の横綱吉葉山)を破って優勝・十六年の同大会で高柳武治君が渡島代表杉村君(後の横綱千代の山)を破って優勝・二十年には高木定義君が室蘭代表花田君(後の横綱若の花)を破って優勝など個人としての戦跡も華々しい思い出があり、団体としては昭和十六年全道選手権優勝、同年仙台大会第三位・二十一年管内大会優勝、個人浜口君優勝・二十二年管内大会優勝、個人浜口君優勝・二十三年管内大会優勝、個人浜口君優勝、中山君三位・二十四年管内大会優勝、個人石川君優勝・二十五年管内大会個人高木君優勝などなど、誠に輝やかしい成績を残している。

初期の頃以来江別市相撲界又、本道相撲界に貢献した先輩は数多いがその内の幾人かは他界された。今、なつかしく思い出されるときも心からご冥福をお祈りするものである。百年記念に設立された市民体育館には立派な土俵も新設されたが、この機会に故人の功績をたたえ、今後とも江別相撲連盟の関係者は力をあわせて、その振興に努力することを誓うものである。

(名誉会長)	清水重雄
(顧問)	渡部武司・金内与四美・清水重雄(兼)
(会長)	土蔵辰馬
(副会長)	高柳武治・高木定義
(理事長)	中山満
(理事)	石川外三・大場欣市・小山千芳・山崎留夫・浜口勇
(監事)	角建雄・佐藤良男・有野広実・石川俊春・橋畑寿雄 藤田昌之・山崎実

## 江別陸上競技協会

昭和二十三年。戦後の混乱期であったが、野幌在住の陸上愛好者が、「全野幌体育連盟」を創り、四地区町民参加の大運動会を開催し、この事業がきっかけとなって、当時道陸協の理事であり国体の監督として、又短距離の選手として活躍していた佐野猛氏が愛好者に働きかけ、昭和二十四年七月に「江別陸上競技連盟」を結成し、会長に岩田政勝氏、理事長に佐野氏という顔ぶれで、事務所を江別町役場に置いて新発足をした。次いで十月に創立記念マラソンを開催し、一方、グラウンドの設置について町に陳情し、現在の飛鳥山競技場の位置を強く要望した。当時この一帯はイモ畑であった。

昭和二十五年に「江別陸上競技協会」と改称・改組し、江別・野幌間マラソン、江別選手権大会・三部対抗（江別・琴似・手稲）石狩青年団対抗江別予選・町民陸上大会などを実施した。この年飛鳥山公園の整備がなされ、一周四百米の競技場が完成した。

昭和二十八年に札幌陸協に加盟。三十年七月には飛鳥山競技場は不備な点もあったが日本陸連認定の第三種公認競技場となる。以後全道規模の大会の会場として使用され、その運営にもあたることになった。

昭和三十三年、役員改選。会長に佐野氏、理事長に尾崎宰司氏となる。昭和三十六年に規約一部改正。三十七年には岩田氏再度会長となり、理事長に佐野氏となる。さらに専門委員会の再確立がはかられ、札幌陸協から独立し、道陸協の十六番目の加入協会となった。この年東京オリムピックが開催されている。

昭和三十八年に五陸協対抗陸上（室蘭・日胆・夕張・石狩・江別）を主管する。この年の後期から会長に高橋行雄氏、理事長に佐野氏となる。

昭和四十一年に会長高橋氏、理事長に佐野氏となり、規約の一部改正がされた。また、この年から道女子短大競技場で、南部顕彰記念道女子陸上が開催され、以後江別陸協が主管している。

昭和四十四年に会長高橋氏、理事長に渡辺隆氏となる。走り高跳びでフオスベリー跳びが普及しだした時期である。

昭和四十七年後期に会長高橋氏、理事長に渡辺登氏となり、五十年に会長高橋氏、理事長に佐藤平康氏となり現在に至っている。同年に市の企画による市民マラソン（十月）を運営し、以後毎年継続している。昭和五十一年から、シーズン最後をかざる原始林クロスカントリーを開催している。

この数年、道陸協主催の数多くの大会を主管しており、競技場も逐年整備されていることは関係者の喜びにたえないところである。昭和五十四年は創立三十周年にあたるので、特別事業として記念誌の刊行、記念式典の挙行により喜びを分かち合い、一時期を劃した。この三十年間に、数多くの選手が育っており、全国規模の大会にも代表として多くの選手が参加して優秀な成績を残して、江別陸協史に永くその名を留めている。

昭和五十五年現在協会登録者は、審判員五十二名、競技者は一般青年学生を含めて一七〇名を超えている。今後ともに会員の増加、啓蒙、競技会開催のPR等、適確な運営に努力していこうと役員一同覚悟を新たにしているところである。

### 現役員

会長	高橋行雄
副会長	角谷正宏・加藤敏夫・恒遠一男
顧問	佐野 猛
参 与	岩淵成雄・渡辺 登
理事長	佐藤平康 副理事長 最上光弘
監 事	松井礼次郎・中沢儀三郎
常任理事	佐藤平康・最上光弘・飯田敏光 遠藤 勲・草野 修・松本紘一 小玉博義
理 事	砂田卓宏・今 彊次・小山勇夫 三宅久雄・渡辺広志・岩田一孝 棚橋信男・武田嘉美・本門智江子

## 江別 野球 連盟

### II 連盟 設立 前 II

昭和二十年八月十五日、日本は敗戦の憂目にあい、領土は狭められ荒れた土地からは恵みはなく、工業施設は破壊され住宅は灰になり、復員者・引揚者の帰還、等の相乗効果が生じ衣食住は極度に窮乏し、人心は混乱と虚脱状態に陥入り、その虚脱状態と戦争の後遺症が残る中で、いち早く復興したスポーツは、水泳・陸上・野球の各競技と云う。

野球に関しては、物資不足の折、手製のクラブ・バットにつきはぎだらけのミットを相互に持寄り近郷在住の野球愛好者達が各校の校庭・各広場・野球場に集い一打一喜一憂して楽しみ喜んでいた。

次に江別での野球は隆盛を極め、各所は球団が誕生し野球チームの増加は加速度的に殖えた。

職域チームは、北日本製紙・北電江別火力・江別国立病院・江別郵便局・江別町役場・土木機械工作所・興農公社地域のクラブチームでは、北江・江陵・富士・ライオン・レッドスター・コンドル・タイガースの各クラブと十四チーム他に町内会等の数チームの結成をみた。

当時江別で野球競技が出来た所といえ、江別第一小学校・江別第三中学校・江別第二中学校・北日本製紙球場の四箇所だつたと思ふ。

北日本製紙球場と江別第二中学校校庭は現在地とは違い、北日本製紙球場は現在の警備本部と二門との間に位置し六号マシンの当りがホーム・ベースと聞き及んでいる。

江別第二中学校の校庭は、八丁目通りに面し現在の前庭になっていてところと記憶している。

試合の日程は週末の土・日曜日に集中し、チームと試合数が増加にともない球場の使用上の混乱が生じ整理割当に困難な状態になった。

### II 江別野球連盟設立期 II

球団・愛好者諸氏より、「江別町においても、野球連盟設立の時期当来の感あり一堂団結相互協力」の要請発言多数に及び連盟設立の推進が必要との観点から、設立発展する通との確固たる信念のもとに、昭和二十

十三年秋より昭和二十四年春にかけて、スポーツ精神の高揚・体位の向上、健全なる精神、技術の向上を基盤とし、昭和二十四年五月に当時町会議員の三浦光三氏を初代会長に迎えて江別野球連盟の誕生をみた。

### II その後の活動の記録 II

設立の精神を「画餅に帰す」事の事態を見ぬためにも会長を中心に役員各位・協力者諸氏の努力は誠に困難の連続で、燃えたる情熱はただひたすらに困難を克服し、推進して計画、運営に心血をそそぎ込み初期段階での現在の基礎の確立が出来た事は諸先輩の慧眼に、敬意と謝意を表します。

### II 飛鳥山球場の完成 II

江別町営飛鳥山球場は、昭和二十五年六月十一日快晴下で町長を初め、町議会議員、体育関係者、工事関係者、各球団代表の参列で盛大に挙行され、野球功労者十四名が表彰された。

### II 硬式野球・江別・イーグルス誕生 II

江別野球連盟設立時より待望の硬式野球チームが誕生し地元の野球愛好者・連盟役員・連盟登録球団の人達は心よりその誕生を喜び、祝い、練習時には多数のイーグルスファンが集い声援を送り試合時には必勝を祈念した。

昭和二十六年五月、北海道社会人野球協会主催、結成記念大会に出場し第一回戦で北海道拓殖銀行と対戦、塚本の力投、高田の好リードもおよばず残念にも敗退、敗者復活戦には同バッテリーでホクレンに挑戦するも勝利の女神は背を向けたのである。応援にかけつけた数多くの人達は残念無念落胆するも、次回の必勝を願望し選手への激励の言葉を送りねぎらつた。

結成大会に出場した、江別・イーグルスの参加選手名は、

監督 長野 主将 桑原 投手 塚本 綿谷

内野手 桑原・相馬・高田・石崎・秋山・熊谷・山内・山須田

外野手 山崎・朝倉・山下・沢田・以上十五名であった。

この参加者中に現在連盟に在籍し、理事長・現役審判員として連盟運営の重責と激務を遂行している秋山勇氏がいる。

硬式野球が江別に誕生した事は、その後の野球発展に必要なスポーツ精神の高揚・野球技術の向上等の愛好者・登録球団選手に対する啓蒙度の功績は大きな貢献だったと思う。

### Ⅱ 連盟運営の資金づくりⅡ

事業を遂行するには苦難の歴史があり、その苦難の道は運営資金の捻出である、苦難の道は平担ではなく風雪に耐え、いばらの道をあゆまねばならなく映画会を催し、演芸・音楽・歌謡・舞踊団の催しを開催し資金調達の努力、日夜連盟の発展を思い労苦を惜まず、心血をそそいだ諸先輩に感謝の意を表したい。

### Ⅱ 連盟の危機・閉店休業と新聞報道Ⅱ

Ⅱ 創業は易く、守成は難しⅡ昭和三十五年八月十五日(道新)に、基金はあるのに、役員多忙で閉店休業の新聞報道、設立以来十二年間若さと情熱で運営に参画しても勤務先の榮進には、それにとまらぬ重責と多忙が追いかけてくる。連盟事務局長の東京転出はそれに拍車をかけ、極めて連盟の運営推進は困難な状態になった。

当時の理事長片岸(現会長)小島(現副会長)北城(現常任委員)三氏を中心に有志数名が信頼と存続を得る道を見極め、質的向上の具体策・後継者育成・連盟十二年間の歴史をふりかえり、連盟存在の根元を打ち出し転機と受け止め設立精神を再認識し、不滅の意志とスポーツ精神を旗印に昭和三十六年四月に、会長芳賀一三(第五代会長)氏を迎え副会長甲斐六郎・片岸性喜・理事長小島昭次・総務部長松吉宏・会計部長北城鉄雄・審判部長桑原忠雄の各氏が就任し各部に数名の副部長を置き、強力人事体制で第二のスタートとなり、今日の存続された連盟が健在している。

ここで誠に残念な事は昭和三十五年以前の資料の散逸甚しく誠に惜念の至りである。

### Ⅱ 将来の展望とねがいⅡ

現在の江別市営球場が落成を見てから三十年余の春秋が過ぎた。市の人口の増加にともない野球人口の増加は目を見張ものがありチームの急

増加には驚くべきものがあります。

現在市営球場を使用している野球団体は、江別野球連盟・江別野球スポーツ少年団・江別青少年育成会・中学校野球連盟・高等学校野球連盟・リトルリーグ・ポニーリーグ・江別朝野球協会・社会人野球連盟・野球愛好者団体・事業商社とあり、江別朝野球協会・社会人野球連盟は平日並びに早朝の使用であります。他団体の使用は土・日・祭日に集中し各団体は年間スケジュールの事業推進に苦慮し当連盟においても地区労主権の勤労者体育大会、江別市主催の市民体育大会の消化は大幅な遅れとなっております。

昭和五十五年八月末に市関係者の御努力により道立総合運動公園誘致に成功した事は市民として誠に慶賀の至りと心中より喜びを申し上げます。関係各位の御尽力に敬意を感じその功績に敬意を表します。

この機に他市町村の現状を眺め、長期展望に立ち、市民のスポーツ精神の高揚・体位の向上のためにも屋外体育競技施設を重視し、江別市においての各競技団体中、最大人口数を有する野球愛好者が心より熱望している、野球競技場の増設と現競技場の排水設備の充実を、実現に向けての早期実施を願望してやみません。

今後の野球連盟の前途には、数多くのかん難と労苦が対じしていると推測されるが眞の発展は今後にあると痛感する。

希望の彼岸に到達するために活力あふれるエネルギーを打ちつけて、よりよい野球連盟発展への努力を維持したいと思う。

最後に、江別体育協会が創立三十周年を迎えられました事は誠に慶賀の至り深甚よりお喜び御祝い申し上げます。

貴協会の益々の充実発展と今後の江別市体育行政においての眞の指導者団体として、初期の理念を達成せられん事を祈念致します。

(藤井清左衛門記)



## 江別卓球連盟

江別卓球連盟は、昭和三十七年に正式に発足いたしました。これ以前には、王子製紙の同好者の方が中心となり時折、卓球大会を開催していたようです。このような時にあつて、市内の卓球愛好者が正式な組織を作るべく気運が高まり、当時、江高教諭の小沢先生（現札大教授）国体コーチ経歴の政田さん（現副会長）、市役所の吉川さん等が中心となり江別卓球連盟が設立されました。そしてその会長に、当時市議会議員に就いていた事もあつてか、私に指名がありました。ご承知のとおり、私は、ピンボンのピも知らないので躊躇していましたが、強い説得と、私もスポーツがいかに青少年や、明るい社会づくりに必要なものであるかを日頃、思つておりましたので心良くその任をお引受けしました。

さて発足したその当時に遡つてみたいと思ひます。事業の中心と言へば、市が行う勤労者体育大会や市民体育大会が主でありまして、卓球台が揃つた会場がなくその準備も大変であつたようでありまして、この大会運営の主将会議に必ず顔を出してくれたのが王子製紙の服部さん（現理事長）でした。そこで早速彼に目をつけ職場代表として役員に加つてもらいました。そうこうして当連盟の規約が、昭和三十八年九月六日に発足したのであります。また、その当時の役員名を紹介いたしますと、会長 小林一男（市職） 副会長 中村英利（北洋相互） 理事長 政田政一（札医大） 常任理事 小沢清（江高） 吉川敬造（市役所） 理事 服部実（林製袋） 中野毅（王子丸） 和地耕作（北電） 小玉哲郎（野高） 藤本軍三（北洋相互） 桐生勇（消防署） 山本舜二（電々） 中橋実 津島真一（江高OB） 会計 草野実（石狩信金）と記載されております。この名簿を見て思ひ出しますのは、これまで江高OBが運営の主軸となつていましたが、早く市民ぐるみの卓球連盟にしたいとの願いが表われている様です。その後、除々ではあります事業が拡大された例え、銀行さんの会議室を借りて「たそがれピンポン大会」や「加盟団大会」「子供卓球大会」を計画し、実施出来るようになりました。

この間、江別市体育協会の加盟や、又、江別市体育指導委員に政田さ

んが、委嘱されるなど、社会体育の一員としても参画することとなりました。

昭和四十一年には、太田さんが江高から市役所に入られ、それまで事務局を一手に引受けてきた吉川さんの片腕となり連盟業務に当られ、現在は程んど彼のところで連盟の事務が進められております。

従来まで全国、全道大会の子選会は、札幌卓連に包含され、全道大会への出場が容易でなため、単独で出場権を得るべく支部認可の申請を昭和四十二年三月に行いましたところ同年五月三日付で、D支部として念願が叶えられました。この事は、当連盟の歴史に残るひとつであります。そして、この年から、高校、一般がこぞつて全道大会に出場する事が出来ました。この頃の大会運営で思い出しますのは、江高や三愛高がいつも、ボランティアで審判をさせられていました（今でもたいして変りありませんが）学生達はいつも、心良く協力してくれた事には頭さがる思いをいたしました。

昭和四十四年には、佐古さん（現審判部長）が大麻に転居され、協力をしたい旨連絡があり、大変意を強くしました。その後、社会体育の第一人者と現在も活躍中であります。同年、当連盟の努力により「江別卓球少年団」が結成されました。このことも歴史的なひとつでありまして、又この当時入団した少年少女達は、それぞれ社会人として立派に成長されている事と思ひます。翌昭和四十五年には、公認審判員の無資格団体から脱皮するべく講習会を開催し、幾人かの方々が三級審判員の資格を取りました。

昭和四十七年四月、青年センターに於いて、始めて全道大会の開催を受持しました。この大会は軟式選手権で一日のみの開催でしたが、役員各位が宿泊や会場準備、寄付集めに奔走していた姿がまだ記憶に新しいところでありまして、昭和四十年代後半になり、大麻団地も定住化され、地域スポーツも、盛んになりママさんバレーやテニスクラブなどが結成されてきた頃、卓球サークルも出来ました。これには、上田郁子（現理事で市体育指導委員）ら中心となり、昭和四十八年には、佐藤恭三さん（当連盟副会長）佐古さん、番平さん（理事）小笠原さん方々のお力添えで「大麻卓球クラブ」が結成されました。当連盟には早速、加盟団体として加入し、現在も当連盟の中核的役割を果たして下さつております。

翌年大麻クラブは「大麻卓球少年団」をつくり、市内の少年団の中でも優秀な少年団として現在も活動しています。

また、この頃中体連の関連がなくなりましたところ、三浦先生が、三中に転動になられ早速当連盟の理事になってもらい、現在も中体連関係を一手に活躍されております。

このように、曲りなりにも皆さんのお力で運営されなんとか軌道にのってまいりました。余談になりますが、毎年一月には新年会を開催したり、道民スポーツ大会出場には選手のほか、役員一同加わりその試合をダシに、おおいに懇親を深めているところであります。

最近、当連盟からも全国大会へ出場する選手が生まれ、社会人では、太田・東野(連盟理事)君ほか、今年の高体連全国大会、女子ダブルスに、江高の福原、五十嵐君が出場するなどの実績を挙げております。

尚、この秋には「東野幌卓球少年団」が地元、東野幌の福原さんらのご尽力で結成できましたことは重ね重ね喜ばしいことであります。

さて、思うがままに書きつづりましたが、本文中掲載の方以外にも沢山の方々のご協力のありましたことを、申し添え併せて感謝申し上げます。次第であります。

ここに、江別卓球連盟のあゆみは、決してひとり卓球連盟のみならず、江別市体育協会、各学校、そして叱咤激励をいただきました方々があったればこそと思うものであります。

終りにあたり、今江別市体育協会三十周年のたゆまざる努力に、感謝し今後増々のご発展と関係各位のご健勝を祈念し、三十周年記念誌の寄稿といたします。

(小林 一 男 記)

## 江 別 弓 道 連 盟

神代の時代からの伝統をもつ弓。世界中どここの地域でも使われていた弓。それだけに誰にでも親しまれる弓の魅力にひかれて「弓道」に入門する人も数多いことと思われる。

「江別弓道連盟」の創立は昭和三十五年八月に遡る。現在まで二十年を経過したのだが愛好者は比較的少ないのが悩みである。

創立当時の会員といえば王手製紙の従業員と家族で占められていたのが実態で、勿論市内に道場があるわけではなく、昭和十五年に王子製紙に設立されたのが、昭和二十九年の江別市大火災の折に焼失してしまい、その後同工場本部門前に移転改築されて現在に至るまで使われている。

江別市としての弓道場は前記のとおり設置されていなかったもので、市民大会を行うのにも王子の道場は使えないために飛鳥山の現在テニスコートの設けられている場所に、仮設弓道場を急造して、どうにか市民大会を済ませたものである。

江別市民体育館が新設され、構内に弓道場が設立されたのは、体育館の開館後の五十三年十月であったが、弓道愛好者にとっては待望の道場であり此の上ない喜びである。

市民に愛される市民の道場として連日使用されているが、今後も益々良き修練の場として利用され、弓道人口の増加を期待するものである。「濁りなき 心の的を射る弓は 巖もくだけて 花と散るらん」

### 役 員

初代会長	町田竜太 (東京在住)
二代会長	弓田真一郎 (旭川在住)
三代会長	三木高市
副会長	木川政蔵 山北 修 脇坂桂吾
常任理事	笹岡武雄
理事	前田 孝 山中隆八郎
監査	沢口幸三
査	横山正雄

## 江別バレーボール協会

戦後の混乱も落着きを取り戻し、バレーボールを愛好する有志が集り、江別にバレーボールの普及を図る為、昭和二十三年頃協会の設立を目指したものである。

今日の江別市内のバレーボール発展の礎となられた、諸先輩に対し冒頭に感謝を申し上げます。昭和二十年代のバレーボール競技としては、北日本製紙（現王子製紙）が中心となり活躍した時代であり、昭和二十七年頃には国体出場という偉業を達成したことで町民の多くの声援を受け、プレーをしてきたことと聞きおよんでおります。

昭和三十年代から四十年代にかけては、市内のチームにおいても、その力量に差が無く、職場での余暇を楽しむスポーツとして、市民のだけでも気軽に参加できる競技であったと思われまします。

近年の家庭婦人バレーボールの全国規模の活躍は目覚ましく、多くの家庭婦人がバレーボールを通じ、親睦を深めその交流からバレーを楽しむ姿が定着してきております。

江別においても、地域の婦人が余暇を楽しむスポーツとしてバレーを選び、当時協会役員であった、池田春男氏、納谷和行氏がチームづくりと、技術指導を行い、これが家庭婦人バレーへと発展し、昭和五十一年には江別地区家庭婦人バレーボール協議会の結成を見て、現在は加盟十チーム、参加人員百三十余名にのぼっており、今後ますますに大きく飛躍し、家庭婦人バレーボール人口の拡大に寄与してくれるものと期待しております。当協会としては、全道レベルの諸大会を江別市で開催し、そのプレーを市民の皆様にご公開することが、より一層のバレー人口の拡大に役立つものと考えその実施を図っているところです。そのなかでも、江別市民が長い間、待ちに待った市民体育館が江別開基百年を記念し、野幌町に完成したのが昭和五十三年で、このこけら落としにバレーボールの試合を江別市が決定され、当時日本では数試合しか予定されていなかった、全日本対中国の女子バレーが来江し多くの市民に公開されたことが、いかに市民に好評を博したことが、この開催に、当協会も徴力を傾注できたことが何よりも喜ばしい出来事でした。

現在の江別市内のバレー人口の状態としては、一般としての職域チームの参加が少なく非常に残念なことで、今後の課題として残されております。このなかで、一人奮闘しているのが、市役所チームで、昭和三十三年バレー部を結成し以来今日迄、息の長い部活動を続けており、昭和四十三年開基百年を記念したスポーツ大会のバレーの部で、江別代表として慣れね六人制ながら、見事準優勝に輝いたことは、協会としても快挙と市役所チームともども喜び合った思い出がありました。

その後、全道大会に数々出場し、歴戦を重ねながらも今一步のところまで敗退を続けて来ましたが、昭和五十二年には念願の全国大会（全日本九人制バレーボール総合選手権大会）に出場し、翌五十三年も連続出場さらに、五十四年・五十五年と日本産業人バレーボール全国大会に出場し、その目標も全国大会で二回戦・三回戦へと勝ち進むというところまでできたことは、協会加盟チームの歴史のなかで特筆すべきことで、今後とも錬磨され、大きく伸びていただき、その技量と経験を地域のなかに浸透させてくれるものとおおいに期待をしております。

現在、協会で運営する大会では市民体育大会、勤労者体育大会等を柱に中学生を対象にした六人制の試合、一般男女、壮年男女の混成等を開催しております。今後は中学生、高校生の層に重点を置き、さらに日常スポーツをするチャンスに恵まれない、壮年と婦人に大会の場を提供し、幅の広いバレーボールを市民のなかに溶け込むよう配慮し、バレー人口の拡大と、市民の健康保持に助力して参りたいとおもいます。

過去、長い間関係各位と市民の皆様のご支援に支えられて来た、バレーボール協会ですが今後とも皆様のご指導ご協力をお願いいたします。

### 協会役員

会長代行	桑野 健
副会長	桑野 健
理事 長	嶋倉 昭
事務局 長	杉本亮二
	小川公人

## 江別バドミントン協会

江別バドミントン協会の誕生は、昭和三十七年六月であるが、それはまさに呱呱の声を上げたと言った形容にふさわしい。いわゆる夜明け前の当協会を含めた当時の北海道と江別のバドミントン界の背景はと言うと、全道に冠たる札幌と道東の雄剣路市役所が東西の実業団の横綱として君臨、他を圧していたし、高校勢では、札工、札東、北海などが男子では群を抜き、女子では、札北斗、静修などがしのぎを削っていたのである。しかしバドミントンそのものは、一部の少数競技者のみのものである。しかしバドミントン界の背景はと云うと、一般の人々の受けも、ただか女の子の羽根つぎの延長ぐらゐとの認識が、根強く支配していたとも言える。

このような状態であったから、市内にはむろん全市を統括する組織とてなく、またそのような組織を期待する土壌も総じてやせ細っていたと言つてよからう。とは言え、個々には、協会や連盟のような全市を統べる組織の実現よりは、愛好者間での対抗戦、交歓交流をぜひやってみたいとの思いが潜在していたのは事実であった。市内社会人の集団では、北日本製紙（現王子製紙）、江別農協、江別市役所、高校では部としての認知未だしのところもあったが、三愛高、江別高、江別高定時制がバドミントン志向の集団として、シャトルを追っていたわけである。

江別は、札幌バドミントン協会の領域にあり、いわば、のどかな天日の光の下、大海にゆらゆらゆるゆるの小舟のように他律的ではあるが、いとも安穩な揺れかたをしていたのである。この協会創立の夜明け前は、創立期と並んで忘れることのできぬ協会のプロフィールである。

さて、創立の発端を述べるに、その強い因果関係をどこに求めるかはたと迷うのであるが、前述の背景などを踏まえて、施設や指導者、協力者不足、当時需用が少ないことによるシャトルの高価格等々幾多の厳しい悪条件を克服して創立に漕着けたのであった。

一番の悩みは、複数のコートを確認できる会場探しであったが、それでも、とにかくにも、第三小学校の屋内体育館で、ライントレープなどを引く予算もなく、白チョークで競技前一時間以上もかかって、役員、

競技者全員が協力しての計測とライン引きであり、木製の卓球台と飛び箱とネットのたるみをなくすために体育館の窓枠をおおっている格子間に張った細引幾条、今から考えればと噴飯ものである。役員は、ほとんど競技者を兼ね、現在の敗者審判はもとより勝者審判もあたりまえ、昼食は出前のラーメンをすすりながら、ここらにめでたく関係者待望の協会結成記念大会を開催することができたのである。試合終了後のこれまた全員での雑巾がけにもかかわらず、チョークの跡が消えず、翌日学校側から当然ながら大目玉を喰つたりしたが、このささやかな大会が持つ意義の大きさは、まことに測りがたく、強烈な印象を残している。

そのころは、江高定時の指導者出淵先生、小玉、本間、増田、鳴海、今、全日製の田中健児、加藤重明先生、藤原、中川（正）、堀、関、三愛高の井上、島崎先生、酪農大の山形、札幌大の宮下、市役所の井上、飯田、密山、松本、嶋倉、長谷川、北日本の浜口等々の諸氏のご協力と熱意は、創立期にあつてゆめ忘れてはならぬであろう。

創立当時は、協会として市民へバドミントンを少しでもPRすること、つまりは市内でのバドミントン隆盛の条件整備の最たるものであろうとの判断から、競技会数も、それぞれの意義を持たせつつ、協会結成記念、勤労者大会、市民体育大会、江別トーナメント、会長杯争奪、江別選手権と盛りだくさんとし、現在は、所期の目的を果した江別トーナメントを除き、年間切れ目のない流れをつくり上げている。二月又は三月開催が定着した江別選手権は、冬場開催とあつてユニークなセットであり、内外から拍手を送られたものであった。

各大会には札幌はもちろん、岩見沢、広島、栗山方面からの参加が、協会の自腹の招待で多数あり、一躍、全道的に注目される協会のスタートダッシュであった。学生界トップの北海学園大石黒、札教大村井、一般では、札工神山、北海五十嵐、札北斗奥山、静修横山、手稲東中杉田の面々が、大挙して学生、生徒を伴って各大会に参加し、直接間接に当協会の育成と指導に大いに功績のあつたことは、たいへんありがたいこととして協会史の一ページを見事に飾っている。

一方、普及にも全力投球をし、市役所の飯田、密山、中川（正）、江高の堀、関ら各氏の中学校巡回指導、小学生高学年の指導普及を皮切り、以後統々と協会有志による活動が継続して行われたことも印象深い。

財政事情、会場の確保、有志の少なきなど、足を引っぱられることも多かつたが、協会運営もいよいよ軌道に乗りはじめた四十年前前半、江別高校の台頭は、これこそ本協会の歴史に特筆大書されるべきであろう。

西沢、出淵、佐藤(三)の良き指導者を得て、遠藤、吉岡、加賀から、佐藤(信)の恐るべきファイターを経て、木村、岡本、今井、多田、中瀬、古川、桃沢、本間(悦)、それに、高野、平尾、渡辺、宮川の女子、つづいて中川(肇)、棚山、熊谷等の全道、全国的なプレーヤーが輩出したのである。「江高のバドミントン班に入ったら練習で殺される」、そのようなうわさがまことしやかに伝えられたほど、彼らは徹底してバドミントンに取り組んだ。これは学校側、父兄の理解があればこそであるが、本人達の強い意思と精進の賜であることは高く評価されてよい。これらの中で、木村、高野は、昭和五十四年まで国体十年連続出場という偉業を成しとげている。

さてさて、これらの流れを経て現在に至るのであるが、協会組織も一段と整備され、みんなで参加し、共同作業でつくり上げていく協会なのだとの意識がますます固定してきたことは、まことに喜ばしいかぎりであり、三年前に全道的な規模のママさんサークル結成のいわゆる産婆役に協会がなり、婦人の愛好者増、ひいては全体的な底辺拡大の大きな布石となったことは見逃すことができず、その自主活動も見るべきものが多い。中学生の競技人口も年々増加して、各種大会では、申込のあまりの多いことにうれしい悲鳴をあげている。地域や職場でのバドミントン熱も年を追うごとに高まりをみせ、十九年前にささやかに不器用にまいた種は、今や見事に結実したと言いつて過言ではない。

私達はこれから将来をはるか見やって何をなすべきか。課題は山積していると言つてよい。スポーツのより生活化をめざして、バドミントンの果す役割もまた大きいのである。それこそ、気軽るにいつでも誰でもがやれるバドミントンを、もつともっと家庭へ職場へ学校へ地域へと浸透させねばならぬであろう。競技にかぎってみれば、このようなスプリングがあつてこそ強い選手も現われようと言うものである。当面の具体的方策は、少年層の開拓と特に男子中高年令層へのバドミントンへのいざないと思われる。

どのようなスポーツ、レクリエーションによらず、広い意味での愛好

者、競技人口の開拓は心がけられているわけであるが、私達のバドミントンは、たやすく飛びついてみたくなる種目だけに、種目固有の持つ取つき易さに溺れてはならない。自戒しなければならぬ。ともあれ、今後ますますバドミントン人口は増加するであろう。それへの加速とそれらの受け皿づくりを市体協や他の体協加盟団体と連携しながら、たゆまず汗していく協会でありたいと思うものである。

役員

- |      |       |
|------|-------|
| 会長   | 小林純幸  |
| 副会長  | 西沢良夫  |
| 理事   | 出淵精吾  |
| 理事   | 飯田哲雄  |
| 理事   | 野坂豊三郎 |
| 副理事長 | 密山征雄  |
| 理事   | 中川正志  |
| 理事   | 本間勝利  |
| 理事   | 井須清治  |
| 理事   | 木村敏男  |
| 理事   | 渡辺繁男  |
| 理事   | 小川愛子  |
| 理事   | 岩村重勝  |
| 理事   | 古川孝行  |
| 理事   | 山崎由晴  |
| 理事   | 岡本 伝  |
| 理事   | 江口歳男  |
| 理事   | 赤塚正三  |
| 理事   | 高野美千子 |
| 理事   | 高橋聖美  |
| 理事   | 金田隆一  |
| 事務局長 | 多田孝雄  |

## 江別 剣道 連 盟

江別市における剣道は、その源を明治の開拓屯田兵に始まり、戦前最もその中心をなしたのは野幌剣道愛好会である。全盛を極めた昭和初期は、甲源一刀流、富田喜三郎教士の門下である免許皆伝、小塚榮四郎をはじめ、大塚豊、宮岸良輝、山岸三郎、伊藤辰弥の各剣士が中心となりその基礎を固め、東に鎌田七蔵の剣剛、又、北には工藤誠、新開昼吉、川手倫惟など、石狩管内に江別剣道の存在を大きく位置付けたものである。こうした指導者、先輩の活躍は市内の剣道愛好者を多数養成し、当時町大会も年一度は札幌より審判の先生を派遣願ひ開催され武道大会として盛大を極めたものである。

しかし戦前のことであり剣道としての団体組織はなく愛好者のみにてその主管は殆んど在郷軍人会か、青年団が総てをとりしきっていたのである。

昭和二十年八月第二次世界大戦の終始符によって、日本古来の剣道は潰滅的打撃を受けたが、講和条約の発効と客観的情勢により剣道復活への方角進度を深め、遂に、昭和二十八年五月一日文部省保健体育審議会が一般社会体育としての剣道の実施を認めるに至った。

しかし実際にはこの間、昭和二十四・五年頃から社会人の剣道競技は地域的に行なわれ、道内においても各地区毎に組織の結成は除々に進行して来ていたのである。

江別市においても、昭和二十七年同志相寄り機熟せりとして江別剣友会の発足を見たのである。初代会長には特に武道に情熱と理解をもたれていた、日野本男氏である。翌二十七年は北海道剣道連盟が発足したのを機会に江別剣友会も道連に加盟するとともに名称も江別剣道連盟と改称し独自の事業計画と予算をもつて現在の基盤が出来上つたのである。

昭和二十八年八月第一回江別市民体育大会に剣道の参加が認められ第一中学校を会場として少年を含む一二四名の選手により盛大に行なわれたことは、剣道が戦後の日本の復興に勇氣と活力を与え、青少年に希望と、たくましい不屈の精神を養い最もふさわしいスポーツとして受入れられた結果であると思ふ。

年間事業としては、連盟結成以来、北海道における団体優勝大会、段別個人選手権大会、東西対抗戦、全国レベル予選会などをはじめ各種大会への選手派遣、市内にあつては、市民体育大会、全江別剣道団体、個人選手権大会、又、スポーツ剣道少年団育成にあつては、江別中央公民館、野幌第二中学校体育館、東野幌青少年会館、大麻体育館、江北地区の農村環境改善センターにおける毎週二回の錬成会さらに全道赤胴少年剣道優勝大会、全道少年錬成会、全国中学校剣道予選会等々の錬成と試合更に一年間真剣に修練し学んだ成果判定の級位審査が近年連盟の事業である。剣道スポーツ少年団は現在市内に五団結成されており約三五〇名の登録であるが最も歴史の古いのは、江別剣道スポーツ少年団で結成は昭和二十八年である。次いで野幌、大麻、東野幌、江北で何れも十数年を経過しており巣立った少年はおよそ七〇〇余名既に立派な社会人となり、或は学生の中堅となつて全道、中には全国的にも活躍している姿を見るとき、本人の努力は勿論ではあるが連盟事業の成果として評価できる。今や剣道は底辺の拡大とともに女子の間にも普及され、その剣道人口は年々増加の傾向にあることは剣道振興の上からよるこばしいことであるが反面指導者の不足が悩みである。地域的に広範であり好ましい時間帯に適切な指導が困難であることで今後の課題として検討の必要がある。剣道の理念は、剣の理法の修練による人間形成の道である。従つて、正しい剣道を、正しく教えることが最も必要であり、このことが連盟の最大の使命として受止めなければならない。

巣立ち行く子供達が江別の発展とともに江別を背負うとき、剣道の将来も又明るく洋々と開かれることであらう。

### 役員

- |      |                            |     |           |     |      |
|------|----------------------------|-----|-----------|-----|------|
| 会長   | 岡 英雄                       | 副会長 | 小泉 陽・徳永健児 | 理事長 | 鷺田三郎 |
| 理事   | 七戸君雄・本間金治・大西昭二郎・石黒 武・平田桑太郎 |     |           |     |      |
|      | 野平昭二・松田久青・山田恒夫・佐々木義光       |     |           |     |      |
| 監事   | 久美屋清一・保倉倉一郎                |     |           |     |      |
| 参与   | 渡部武司・栄花喜久男・竹田 勝            |     |           |     |      |
| 事務局長 | 中山喜美雄                      |     |           |     |      |
| 書記   | 吉田雄策                       |     |           |     |      |

## 江別柔道連盟

江別の柔道は、昭和の始め頃から江別警察署や北日本製紙（現在の王子）の道場を使用させていただき、町の柔道愛好者たちが合同練習をしていた。七年頃から柔道愛好の士が仮設道場に青年たちを集め、興武会と称して技術の練磨と人間づくりに貢献していたが、戦争が激しくなると十七年には明治神宮大会も中止となり、日本の武道活動は全く止ってしまつた。戦後、米軍の指令で武徳会の解散、学校柔道の中止など今までにない危機に直面したが、柔道の高遠なる理想の根強さは再び芽をふき始め、江別においても二十四年、医師村上政雄氏が、柔道愛好者たちと共に柔道同好会を発足させるに至つた。

二十五年より学校柔道の復活、第五回国体から柔道の参加、全日本柔道選手権大会の開催と、めまぐるしい動きになつて来た。このようなか、二十六年に札幌柔道連盟理事、丸山武敏氏が来住して、江別柔道同好会の役員を構成と組織を固め、翌年、同好会から江別柔道連盟と改称、力強く江別柔道の躍進期に入り、以後各種大会に好成績を収めるに至つた。一般の活躍と同様、少年団においても四十五年に全日本柔道少年団北海道支部が結成されるや、いち早く江別分団も加盟、第一回の結成大会以来好成績を残し、その名を高めている。四十九年には少年団後援会を再編成し、新しく江別柔道少年団育成会（会長高間專造氏）が父兄の強い意志で発足、これに対応して専任指導員がさらに強化され、近年めざましい成果を上げています。また、少年団の活動は関係者の注目を集め、江別、野幌、大森、角山と年を追つてその活動の輪を広げ、いずれも全日本柔道少年団加盟をみるにいたつたことは大変喜ばしいことである。さらに、これら少年団の中で女子柔道の普及も著しく、市内小中学生女子柔道修行者は十数名に達し、五十四年、今年と二度にわたつて全道軽量級で優勝し、全日本大会に出場した野幌分団の渡部五月、荘司真美子選手の活躍は特筆される。

昭和二十八年から連盟の行事の中で永く続いているものをあげると、暑中稽古、寒稽古をはじめ大晦日の晩から元旦の朝にかけて行われる越年稽古は全道的にも稀な伝統行事である。

さて当連盟の現状にふれると、現在会員数（成人）は古田島薫平氏が会長に、丸山理事長（八段）を初め九十三名で、三十三人の常任理事、理事を中心に活動しており、高段者数では全道屈指。さらにこの中から札幌柔道連盟の構成する役員八十七名の高段者が、理事、監事として活躍、技術指導の研修に努めている。

五十四年九月には連盟創立三十周年記念式典を行ない、古田島薫平会長が二十年余に及ぶ活躍に対し、北海道柔道連盟から特別功労賞が贈られた。

今後は東京以北随一の大会である東北対北海道の対抗試合を江別市で開催することに大きな夢を持つと同時に、昭和六十四年の国体柔道競技の開催地に立候補、道柔連及び札幌柔連の強い支援を得、三十年間の活動の成果が広く関係者に認識されていることを感謝したい。

### 「活動年譜」

昭和二十七年五月、第一回札幌軍対江別軍の対抗柔道大会開催、この大会はその後、近接市町村対抗柔道大会に発展。

昭和二十八年、江別神社祭典奉納柔道大会開催、以後毎年休むことなく続けられ現在は春、秋の二回実施。

同年、第一回市民体育大会開催、今年二十七回を数える。

同年、第一回全江別職域対抗を開催一チーム十五名編成で、開発局工作所、江別警察署、北日本製紙、市内一般の四団体が参加、その後十一回続く。

昭和三十年、第六回全道青年大会を江別市にて開催、団体、個人に上位入賞を果たす。

昭和三十七年、国体北海道予選大会開催、好成績を収める。

昭和四十一年十月、第一回石狩管内少年団大会を開催、上位入賞。

昭和四十三年、第一回当別対江別市の対抗試合を開催、以後開催地を毎年交代し、大いに親善を深める。

昭和四十四年、再度国体北海道予選会を開催、十七名の選手参加。

同年、第一回道民スポーツ大会が開催、石狩管内大会となつて今年まで続く。

昭和四十五年、全日本柔道少年団加盟、第一回結成大会以来毎年参加第六回大会から四年連続優勝を果たす。

昭和五十三年、柔道少年団全道大会開催、小学生の部優勝、中学生の部準優勝を果たし全道にその名を高める。

昭和五十一年春より、少年卒業記念柔道大会開催。

昭和五十四年九月、連盟創立三十周年記念式典挙行。道柔連より古田島会長特別功労賞を贈られる。

昭和五十五年九月、全日本女子柔道選手権大会軽量級で、渡部五月、莊司真美子選手三位入賞を果たす。

「歴代会長」

- 初代 村上政雄（昭和二十四年～昭和二十六年）
- 二代 森田亀雄（昭和二十七年～昭和二十八年）
- 三代 曾良中清作（昭和二十九年～昭和三十年）
- 四代 矢野 熙（昭和三十一年）
- 五代 石沢 武（昭和三十二年～昭和三十三年）
- 六代 古田島薫平（昭和三十四年～）

「現役員」

- 会長 古田島薫平
- 副会長 清水重雄・岩田善輔・加賀谷喜八
- 理事長 丸山武敏
- 理事 百町寅久以下二十三名
- 幹事 工藤基吉以下十八名

江別スキー連盟

// 恵まれぬ環境をのり越えて //

山のない江別にもスキー連盟を!! という意気込みから発足したのが五十二年九月。まだまだ若い連盟であります。会員数は、発足初年度が、一八四名、五十三年度一三一名、五十四年度一六三名、五十五年度三二一名と順調な伸びをみせています。

会 長 伊藤 豪  
副会長 武井 孝・岩淵威雄  
理事長 久慈正徳  
指導員 十名 準指導員 十三名といったスタッフで会員のニーズに対応しております。年間行事としては、講習会、検定会、スキー教室

スラローム大会、道民スポーツ冬期大会予選などをメインに、その他、チューンナップ、ワックステクニク講習、映画会、バスによる遠方へのスキー教室（夕張、レイスイ）、あるくスキー講習会など、もり沢山の内容で、昭和五十五年度としては左表のとおりです。

連盟のホームグレンデは、万景閣スキー場を借用している訳ですが、これは隣接する岩見沢スキー連盟さんの尽力と、万景閣さんの好意によるものです。これに関しては毎年、会員各方面から、江別に簡易スロープを完成できぬものか？ との要望が出されており、会長以下事務局としても頭を痛めている現状です。ともかく山のない江別にもスキーの間が集い、難産のすえ出来た連盟ですから、今後ともこの火を消すことなく、ともし続けていかなければいけません。

ガンバレ山なしスキー連盟!!

事業名	開催月日	会場	参加数
市民スキー教室	55.1.3	万景閣	42名
	55.1.6	万景閣	22名
会員スキー教室	2.3	"	38名
	2.17	夕張Mレイスイ	42名
	3.16	万景閣	34名
	55.1.7	万景閣	26名
冬休みスキー教室	8	"	26名
	55.1.20	"	25名
	2.11	"	45名
	2.23	"	18名
スキー講習会	2.24	"	42名
	3.8	"	12名
	3.9	"	49名
	55.1.20	"	25名
	2.11	"	30名
スキー検定会	2.24	"	35名
	3.9	"	48名
	55.1.27	"	38名
市民スキー大会兼道民スポーツ石狩大会予選※石狩大会	2.10	広島町	
	55.1.6	大沢コース	25名
	1.20	エトス川	49名
あるくスキー講習会	2.3	四季美	36名
	2.17	カツラ	39名
	3.2	基線	20名
	3.16	志文別	39名



## 江別空手道連盟

武術としての「唐手」が「空手道」として確立して以来五十年を経て  
いる。その間、幾多の試練をくぐり、研鑽を重ね、現在武道として、更  
にスポーツとしての普及発展を続けて今日に至っている。

このことは、理想的な大衆スポーツとして、また護身の術として、空  
手道の持つ独特な真価が認められてきた証左であろうと思われる。

江別市における空手道の歴史は古く、市内空手道諸団体、諸流派が各  
々主体性をもってその普及に努力していたものであるが、昭和五十一年  
に市内の各団体、諸流派が、関係者の献身的な努力によって、大同団結  
することができ、「江別空手道連盟」として発足したのである。

当連盟は、(財)日本体育協会に参加を認められている(財)全日本空手道連  
盟の傘下組織であり、また全日本に加盟している「北海道空手道連盟」  
の加盟団体として、全道選手権大会、国体道予選大会、地区連盟大会へ  
の会員選手の参加出場と、役員及び審判員としての参加など、従来積極  
的な活動を続けてきているが、連盟の役員は道連盟或いは全日本連盟主  
権による公認審判員、公認指導員の資格取得に励み、江別連盟に力をつ  
けるべく精進努力を続けている現状である。

昭和五十六年には国民体育大会に於ける正式参加種目となることが決  
定しており、空手道は益々普及発展の一途を辿るであろうことが予想さ  
れ、当連盟においても近い将来一層の発展が期待されるし、多数の選手  
がおくられるであろうことを確信するものである。

会員数も一九〇名に達した「江別空手道連盟」は、年々会員数が増加  
しており心強いものがあり、市内での各種の大会参加や、市民体育大会、  
少年大会の開催参加奨励など、青少年を主体にして大いに成果をあげて  
いるわけである。

今後ともに空手道を通して、青少年の健全な育成と、江別市民の体位  
の向上に資するとともに、空手道を愛好する青少年の輪が益々拡まるよ  
う、体育協会との連帯の上にならば市民に愛される空手道として、役員  
会員ともどもに連盟の発展を目指して努力する所存である。

### 役員

会長	伊藤信一
副会長	音部憲夫・安藤裕実
理事長	菅原晴隆
副理事長	甘利幸雄
理事	川内孝夫・渡辺昇・中田清行・岡部三男・川崎英俊
	杉山徳司・佐藤紘平・松山増男・金内晴夫
事務局次長	加藤憲三
事務局次長	花田誠
監事	花田結・中田清行

## 江別水泳協会

江別水泳協会は、昭和四十五年六月三日、工藤祐三氏（当時一中・現野幌公民館長）が発起人代表となり、井戸久女史（大塚）大郷正裕氏（当時岩見沢電報電話局・現江別市報話局）吉田功氏（当時一中・現千歳中）池田春男氏（当時体協事務局長・現江別市収入役）等が発起人となって江別水泳連盟として設立した。

昭和五十五年四月に日本水泳連盟の指導で現在の水泳協会と改称した。発足当時の役員は、会長に横田勝弥（現江別市議会議員）副会長井戸久女史、馬淵良作（当時三小校長・現石狩町教育長）理事長工藤祐三、その他吉田・大郷等の人達が名を連ね、協会の礎となった発起人の名が初代役員として残っている。

当時はまだ青年センターの温水プールがなく、一中・三小などの学校プールを会場に小・中学生を対象とした水泳教室を開催したが、まだまだ水泳には関心が低く参加者もまばらで、指導員も少なく何から何まで不十分なことが多かった。そうしたことから、指導体制を充実させようと、北海道スポーツ技術指導者講習会、国立大雪青年の家水泳指導者講習会、又日本赤十字社が行っている水上安全法講習会など多くの講習会に会員を派遣し指導員の養成に力を注いだ。これらの会員が現在の協会の指導員として活躍している。

昭和四十七年一月、青年センター温水プールが落成し、四季を通して水に親しむ事が出来るようになり、水泳人口も年を経るごとに増加するようになった。この落成を記念した水泳大会では、小樽の好泳会からの特別参加もあり大変盛大に行なわれたものである。

昭和四十八年六月には、道内各地の指導員八十名を集めスポーツ技術指導者講習会が青年センター温水プールで開催されたが、当時道内では数少ない温水プールとして、全道に注目されたものである。

現在では公認指導員も四十名程になり指導体制も段々充実してきているが、当時は教人の指導員と会員が交代で温水プールの監視協力、水泳指導等又自分自身の練習と忙しい毎日を送っていたことがなつかしく想い出される。

連盟設立後、昭和四十五年六月十八日市体育協会に加盟し、同年八月二十三日、第十七回市民体育大会に第一回水泳競技大会として参加して市内での水泳競技大会の最初となった。その後四十八年江別水泳少年団、四十九年江別スイミング・スイフトと競技水泳の団体が組織され、小・中・高校の児童生徒が本格的に競技水泳を始め、全道、全国大会、末はオリンピックをめざし練習に励んでいる。今日では幾人かの国体選手、全国大会での入賞者を出すまでになっている。又それと同時に、江別市令別水泳競技大会、江別選手権水泳大会、道民スポーツ石狩大会と市内でも水泳競技大会が開かれるようになり「より速く」という競技水泳が注目されてきたが、これらの影には大郷、川村両氏の熱意と努力が見のがすことは出来ない。

こうして、会員一同が力を合せて水泳の普及に務めた結果、現在では特に青年センターが開催する各種水泳教室にはいつも定員以上応募があり、市民にも水泳が定着して来た感があり、我々の努力が実を結んで来たのであるかと喜んでいる。

今後は、さらにスポーツとしての水泳が市民に定着することと、青年センタープールに行ったらいつでも水泳指導が受けられるように専任の指導員の再配置と、公認プールの設置を望んでいる次第である。

### 役員

会長	横田勝弥
副会長	佐藤正範・井戸久
理事	大郷正裕
総務委員長	大野 聡・渡辺良洪・芳賀昌行
指導委員長	和倉静子・井戸久・木野村真慈
普及委員長	吉田ルミ・金泉貞子・工藤祐三
記録委員長	川村恒宏・小林恒信・笹原辰夫
競技委員長	佐藤昭彦・佐藤正範・畠山英治郎
監事	小松要作・清藤 昇・佐藤宣夫
顧問	井戸清志・越田正晴・納谷和行 西尾 晃・松橋徳弥

（大野 聡記）

## 江別バスケットボール協会

厳しい冬が去り、五月のさわやかな風が街を包み始める頃、江別バスケットボール協会の新たな活動が始まる。

六月の勤労者大会、七月、八月は道協会関係、九月の市民大会、十一月はあすかスポーツ杯、十二月の会長杯、年が明けると二月の倉島杯が待っている。

それぞれの大会を思い浮かべてみるだけで胸が高鳴ってくる、そんな楽しい大会の連続である。

コート内の五人のメンバーが、心と技を一つにして一つのゴールにボールを運ぶ。そして得た勝利の影にいつも必らずコーチ、マネージャー、そして六人目、七人目のメンバーの力がある。

ボールを中心に広がる仲間の輪、バスケットに取りつかれたそんな人達に支えられながら、協会は育ってきた。

私が事務局を引き継いだのが昭和46年であり、創設当時の記録がなく役員も大きく変わったため、当時をふり返ることはできないが、市内の中学校を会場に、勤労者大会、市民大会をメインに活動されていたことがうかがわれる。

江別のバスケットボールの父とも言える、倉島 繁先生を初代会長に迎へ、協会はスタートし、佐藤利雄氏(当時一中教頭)そして現在の池永和親会長へと引き継がれ、四五〇名の登録選手と共にバスケットに取りくんでいる。

十年近く続けていると、様々な思い出がよみがえり、文字にすることはむずかしい。

青年センターの固いフロアー、審判不足で一日に六試合も笛を吹いて翌日、階段を上ることが出来なかったあの足の痛み。(これは今でも、あまり変わっていない。)

市民体育館のオープン//裏方仕事に疲れた心に大きな刺激を与えてくれた。バスチマンなら(今流に言うとかイジャー)あの暖味のある、フロアーを見れば誰だつて寝てみたくなる? つまり精一杯、汗を流した後、切らせた息を整えながらゴロリと横になり、じつとゴールを見つ

める、その時の何とも言えない快い疲れを、あのフロアーは受けとめてくれるのである。

バスケット協会の80年代は、華麗な幕あけであった。

市民体育館の開館一周年を記念して、日本リーグ一部の日本鋼管と三井生命の招待ゲーム。一月二十七日であった。

両チームの力強いプレイの連続に予想以上に来て下さった観客の人達の歓声が今でもこの耳に残っている。

土曜日の午後、市民体育館に仲間がやって来る。何も言わなくても、自然に始まるコート作り、江別高校、そして三愛女子高校の皆さん、いつもありがとう。

バスケットだけではないけれど、主役はまちがいになく選手である。しかし、バスケットについて言えば、オフィシャル、そして審判、いろんな人の協力でゲームが行なわれている。そのことをいつも心のどこかに置いて欲しい。それが江別協会の登録選手の第一条件なのです。

(海上 記)

役員	倉島 繁
顧問	池永和親
会長	水川 昭
副会長	中内良朗
理事長	久司敏夫
理事	荒川光夫
理事	村松光男
理事	大野 聡
理事	中野正幸
理事	村上 良
理事	橋岡勝利
理事	喜多俊之
理事	安栄雄司
事務局長	海上 修

## 江別軟式庭球連盟

### 結成前

連盟結成前は江別庭球協会と称し、昭和二十五年七月十七日発足したが、其の前の軟庭界の実態は判らない。しかし、当時既に江別高女にコートが一面有り、北日本製紙工場にも二面有ったのだから同好の人々が集まって楽しんで居たものと思われる。そんな程度しか判らないので、故老の中で旧事を知っている方に御聞きして記録したいと思っている。

### 結成期 (以下人名の敬称略)

昭和二十五年七月八日、江別高等学校に於いて、江別庭球協会結成発起人会開催。出席者は、福本重亀(当時、北日本製紙工場勤務、提唱者)阿部梅吉(当時江別高校教員、提唱者) 松本昌喜(当時北日本製紙武藤敏一(当時江別警察署次長) 中鉢茂(当時札幌鉄道局) 寒賀井勇(当時江別第三中学校教員) 桐野某(当時江別第三小学校教員)の各氏で、席上福本、阿部の両氏から結成の趣旨が説明され、次いで協会規約が審議成立、最後に協会結成大会の日程がきめられた。

昭和二十五年七月十七日、江別高校に於いて江別庭球協会結成大会開催。席上規約が成立したが、第一条で名称を敢て、江別庭球協会としたのは将来硬式の愛好者が出るであろうから其の時には其れ等の人々も一応吸収しなければなるまいとの遠慮からであった。昭和四十二年九月八日に発足した大麻団地テニスクラブの中にやがて硬式部が設けられたが江別庭球協会の規約に抵触せざること勿論であった。

### 当時の協会の役員

会長	福本重亀(北日本製紙)	理事	中村謙(北日本製紙)
副会長	武藤敏一(江別警察署)		笠羽亮三(北電火力発電)
	安斉富(北電火力発電所)		寒賀井勇(江別第三小学)
理事長	阿部梅吉(江別高校教員)	会計	辻茂(江別第三中教)
理事	千葉某(雪印乳業)	監査	松本昌喜(北日本製紙)

事業内容は、春季練習会、春季大会、夏季練習対外試合、町民軟庭大

会、稽古納会等が結成当時の主なものであった。

### 其の後の活動

今年迄の活動の中から二、三摘出してみることにすると次の様なことになるかと思う。

◎二十九年江別に市制が施行され、九月五日に第一回市民軟式庭球大会が開催され、今年迄引き続き二十七回目を迎えたわけである。二十五年九月から始まった町民軟庭大会は二十八年の第四回をもって終了したのでそれを通算すると、江別市民軟庭大会は今年で三十一回目となる。

◎三十五年四月、江別庭球協会は飛躍発展し、江別軟式庭球連盟となり、規約も変わり、北海道軟式庭球連盟江別支部ともなり、対外的な活動も更に多くなつた。高校などは札幌地区高体連大会で屢々上位となり全道大会へも進出したし、市民体育大会の参加者は他の競技種目を凌ぎ屢々首位になつた。

◎四十三年六月二十九日、江別開基九十周年、市制施行十五周年記念体育大会が開催され、総合開会式場で、当時の福本会長、阿部理事長の両氏が江別体協により表彰された。体協の表彰は此の年が初で、其の後連盟からは対馬英二、勝田太市、佐藤多喜治、矢田巖、中川三男の各氏が受彰している。

同年八月三日、四日に恵庭町に於いて開催された北海道百年記念石狩管内スポーツ大会庭球競技の部に男子のみ十六名出場、札幌には惜敗したが、他の市町を破り団体、個人共に二位を獲得した。次年度の大会からは殆んど江別は男女総会で常に一位を占めて来ている。

◎四十六年七月、江別飛鳥山コートで都市対抗全道予選大会が開催され、男女併せて十余名出場、善戦の結果、札幌、旭川の強豪を破り堂々優勝した。

◎連盟の事業の中で特に記さなければならぬことがある。それは、三十九年から現在迄十七年間、毎年八月一日から十日間を予定して、全員の無報酬で、連盟の有資格者によって奉仕されて来、そして又今後も続くであろう『夏季テニス教室』である。全市民の希望者を対象にしたもので、本当の初心者から、所謂中級程度の人々が、性別、年齢差に関係なく参加している。平均すると少ない日は五十名位で多い日には

七十余名となった。小学生から老人迄参加し、朝六時から八時迄熱心に受講していた。参加料は無料であったが、最近ボールの値上りの為止むを得ず昨年からボール代を出して貰っている。此の教室が及ぼした軟庭普及への効果は実に大きく今日のテニスブームの一原因をなしていると思う。

### 現在の状態

加盟団体数十九。会員数約千六百名。最近は婦人を主とした動きが活潑で、全国的なテニスブームの波に乗り常時愛好家が増えている。と言うのは、前記十九の各クラブに所属せず、独り、又は家族で楽しんでゐる人、又勤務の都合で札幌のクラブに属している人が相当教居ることには確かだからである。

連盟の事業については市内の各種大会だけでも二十回有り、他に道連盟関係の大会が二十回余。其の上に各自所属のクラブ行事が年に五、六回はある。更に、右の諸大会の他市営コート増設の運動とか、各種講習会や会議などもあるがこれ等は殆んど全部無報酬である。此の事は独り軟庭に限らず他のスポーツ団体も大同小異で、江別市の社会体育の振興に寄与する所実は大いなるものがある。今年特に例年と変わった事が有った。それは当連盟に当別の軟庭協会が加入したことである。現在の当別町の協会は道連盟の支部として発足する迄には、尚幾多の整理、充実しなければならぬ点があるので、当分の間江別の連盟に加入し、道連との関係を維持することになる。江別連盟としては独立出来る日の一日も早く来る様援助を続ける。

### 将来の展望

◎高齢化社会の傾向から高齢者の健康管理と余暇の善用等も更に具体的に考えられなければならない。行政側も本人自身も共々取り組んで来て居り、各自は各々の立場で或はゴルフ、或いは競歩、或は散歩などして健康の維持に努めているのは当然の事と思う。其れ等の中で此の軟式庭球は大きな存在意義を持つ。昨年の総理府広報室の「体力スポーツに関する世論調査」にも反映している様に年齢の差、性別を超えてテニスの希望者が圧倒的に多いことでも解る。私は今更限られた紙面でテニス

の効用を云々はしないが、特に八十歳でも七十歳でもそれなりに楽しめるスポーツであるからそれに代わるスポーツが出現する迄はテニスブームは続くと思う。

◎それで最後の項目の願いになるのだが、通年テニスの出来る様に特に冬季の施設をもっと充実して欲しい。小学校から大学迄各校にテニスも出来る様な条件を備え、希望者にはせめて基礎だけでも教えてやる様にするのも一案となろう。

(阿部梅吉記)

### 役員名

会長 阿部梅吉

副会長 浅野四郎 中川三郎

上森武一 堀和雄

理事長 根本敏明

(副理事長 四名。理事 二十二名)

会計監査 勝田太一

顧問 矢田巖 対馬英二

# 江別市体育協会創立30年記念座談会

語る人

- |             |        |
|-------------|--------|
| 江別市体育協会副会長  | 佐野 猛氏  |
| 江別市青少年育成会会長 | 泉 重陽氏  |
| 江別陸上競技協会会長  | 高橋 行雄氏 |
| 江別野球連盟副会長   | 小島 昭次氏 |
| 江別相撲連盟副会長   | 高柳 武治氏 |
| 江別市体育協会監事   | 池田 春男氏 |
| 江別市体育協会理事   | 七戸 君雄氏 |

司会

江別市体育協会事務局次長 中川 正志

体協創設当時 陸上競技場はイモ畑

**司会** 本日は、ご多忙中お集りいただきありがとうございます。江別市体育協会も本年創立三十年を迎える訳ですが、これを記念いたしまして、永い間、体協の運営と市民スポーツの振興に尽された方々を代表して、皆さんの想い出話などをお聞きしたいと思います。

体協の創設は、戦後の混乱な時代が一息ついた頃だったと思いますが、創設当時からご苦労されてきた佐野さんに当時の様子などを、伺いしたいと思います。創設前の話もお願ひします。

**佐野** 江別体協の前身として、昭和二十三年に野幌体連ができました。これが主体となって陸上競技連盟を創設した訳です。この陸協を中心として、昭和二十五年に、陸上野球、庭球、卓球、排球、柔道、相撲、自転車、八団体でスタートした訳ですが、当時は、体育協会とは言わず、体育連盟と言っていました。

会長には、陸協の岩田さん（現会長）、副会長には、庭球の福本さん、野球の三浦さんがなり、理事長は私でした。そのほか各団体から常務理事が十一名出まして、現在市役所におります渡辺登さんや、当時の江高の先生であった尾崎さん、亡くなりましたが桑原茂雄さん、今日お見えになっている高柳さんなどが運営に当たった訳です。その頃の町長は古田島さんでして、当時の役場の二階を借りて連盟の発足式をしました。

**小島** 戦後まもない頃でしたから、体育施設もなく、飛鳥山に野球場があった位でしょうか。

**高橋** ここに当時の新聞の切抜きがありますが、昭和二十五年六月十三日に飛鳥山球場開きをしたことが掲載されています。バックネットがあっただけで、戦前は競馬場として使われていました。

**高橋** 小島さんがおっしゃるとおり現在の野球場は競馬場で、今でも三丁目から球場に通ずる公民館の横の通りは、競馬場通りと呼ばれ、当時の名残りをとどめています。

**佐野** その競馬場の横は、今は陸上競技場になっていますが、当時は北電の方が皆んな野菜を培っていました。陸上の大会はグラウンドがないため、二中のグラウンドを使っていたものです。当時としては陸上が一番盛んでした。

**池田** 体育施設が出来始めたのは四十年代に入ってからでしょうから、施設面では大変苦労されたと思いますね。バレーボールも北日本製紙（現王子）に一チームあっただけで、地道な活動をしていた頃ですね。この一チームしかない時代が相当永い間続いています。

**司会** 自転車協会があった訳ですが、施設もない時代でしたから、練習などは大変でしたでしょうね。それと、他の団体の活動などはいかがでしょう。

**高橋** 団体種目として自転車競技が盛んでしたね。ちよっと記憶が薄れましたが、水野さんという方が大変熱心で、団体で入賞したと思います。

陸協の三十年誌に佐野さんが寄稿されておりですが、それをお読みすると、野幌の町民運動会が協会を創設する導火線の役割を果たしているようです。

泉 今の育成会の前身である補導会が出来たのが、昭和二十五年で、今年三十年を迎えたのですが、その頃は子供達の野球には、青山さんや中川さんが一生懸命やってくれました。

小島 野球の好きな連中が多かったから、子供達と一緒に自分達も楽しんでいたのでしょ。 (笑い)

七戸 剣道は、戦後マッカーサー指令で一時中止を余儀なくされていまして、二十七年頃に第一回の市内大会を第一中学校でやりました。愛好家は多かったのですが、政治的な問題から戦後すぐにできる状態にはならなかったですね。

高柳 相撲も一時中断してしまいましたね。戦前は盛んなスポーツでした。江別の相撲は全道的に有名で強い選手も多かったですよ。体協副会長の清水さんも背は低いんですが、力は強かったですね。全道大会では、角界入りする前の吉葉山、千代の山、若乃花などと対戦して、これらを破って全道優勝した選手が多勢おりました。物の無い時代ですから、手つ取り早く相撲に入ってしまったのかも知れませんし、日本人の体格に合ったスポーツであった訳でしょう。青年のスポーツという相撲が一番盛んだったのではないでしょか。

小島 相撲の話でしたが、昭和二十四年七月に大相撲の前田山一行が巡業にきましてね。オール江別と野球の試合をしたんです。江小グラウンドでやりましたが、江別始つて以来の観客が入りました。前田山のネーム入りユニホームを着てまして、それはすごい人気でした。

池田 私もバレーボールを始める前は野球をしていたんですが、戦時中はアメリカのスポーツということで一時中止されていましてね。戦後すぐ復活したと思えますが。

高橋 当時の陸上競技も戦時競技とか言っていました。手留弾の遠投などもありました。

池田 やり投げは、単棒投げですか……。 (笑い)

■米持参の国体参加■

佐野 陸上競技は色々と思い出が多いですね。市内の陸上は、二中か二小のグラウンドしかない訳ですよ。ところが二中のグラウンドの中に大きな木が一本ある訳です。当時は屯田兵村財産区とのつながりがあるって、木一本と言えども簡単に切れないんですね。これを切れば一周三〇〇メートルのトラックになるんですが……。大会当日、財産区の大塚さんを名誉大会長にして、大きなリボンを持っていったら、「よし、切つていいぞ。」という訳です。大笑いしましたね。岡さん(現助役)も、その頃は、ハチマキ姿で走っていました。剣道が禁止された時代ですから、走ることで身体を鍛えていたんですね。

七戸 昔は、祭りと言えば学校は休みと決っていましたから、奉納相撲とか、奉納剣道、柔道が盛んで神社の境内は大変な混雑をしたものですが、今は奉納試合もなくなりましたね。

泉 憲法上の問題が論議されました、神社の奉納にスポーツはまずいとか何んとか言われて、ダメになりましたが、神社としてもさみしいことでしょう。少年野球も祭りのときは、神社の方を向いて拜礼だけしているのには笑いますね。 (笑い)

高柳 そうですね、相撲も神社の奉納試合には欠かすことのできないものでした。とに角、マワシ一本あれば他には道具は一切いらぬのですから、随分沢山選手も出場し、黒山の人だかりの中をやったものです。

佐野 国体も笑い話が多かったですね。第一回か第二回頃の国体だと思えますが、出場選手は各自米一斗ずつ持参

です。カーキ色の国民服が何か着ましてね。今のよう  
にブレザーコートなども無いんです。ユニホームはバラ  
バラで、ただ北海道と書いたネームを付けているだけ  
です。汽車にゆられて、便所の中で人が座っていました  
ね。トンネルを通過すると顔もススで真黒ですし、大会  
では疲れ切っていて走るのには二の次でした。(大笑い)

泉

食糧事情は、北海道は良かった方ですね。

小島

今は考えられないことですが、当時は野球の試合は電  
話一本で出来ました。私の家にメンバーが集まりまし  
てね、どこかと試合しようと言ってます。さっそく、王子  
や北電に「一試合やるぞ。」と連絡しますと、勤務時間  
中でもすぐ集まってくるんですよ。休暇願ひもなかった  
のではないんですか。今ですと、二週三週間前から予定  
を組んでやっと出来る状態ですから、のんびりしていた  
時代だったと思います。

司会

戦前と創設期を中心にお話しをしていただきましたが、  
施設の整備面ではどうでしたしょう。

高橋

陸上競技場は、二十四年に整地しまして、翌二十五年  
に第一回目の第三種公認を取りましたが、次の三十年に  
は整備費として百万円要求したところ、予算がないとい  
うことで七万円しか認めてくれない訳です。七万円では  
整備もなにも出来なくて、公認取り消しになりました。  
(一同大笑い) 今なら市民が黙ってないでしょうね。三  
年間のブランクがありまして、三十三年にまた第三種公  
認を取りましたが、その後はきちんと五年毎に公認を受  
けております。

池田

陸上競技場の公認については、いつもトラブルが多か  
ったですね。それと三十二年頃からバレーボールのチー  
ムが六、七チームになりましたが、室内ではできないも  
のですから、テニスコートと兼用でした。そのテニスコ  
ートも限られておりましたから、体協の会議のたびに、

テニスコートの増設の話がでて大変でした。市が体育  
施設の整備に本格的に取り組んだのは、四十三年の開道  
百年スポーツ大会のときからですね。野球場や陸上競技  
場を約一千万円かけて整備しましたし、その後の石狩ス  
ポーツ大会などの開催も持廻りでやる事ができるよう  
になりました。

七戸

スポーツは屋外でやるものと決っていたような考え方  
が一般的でして、農村に行きますと青年大会などは全て  
屋外でした。それが三十九年のオリンピック以来、都会  
的なセンスの面が強調されてきたから、スポーツは室内  
でやるものと変わってきたのではないですか。そんなこと  
から施設整備が強く要望されるようになってきましたね。  
高柳 相撲の土俵も市民体育館に立派なのが完成しましたし、  
今後愛好者が増加することを期待しているのですが、や  
はり二・三カ所には欲しいですね。昔は、江小のグラ  
ンDにもあったのですが、なくなっちゃいました。

池田

青年センターの完成とともに、行政指導型から民間指  
導型へ移行してきた中で、施設の利用も変化してきたの  
ではないでしょうか。市民体育館の建設にしても、初め  
て市民の署名運動などが行われる中で建設に向けて具体  
化していきまししたし、家庭婦人のスポーツ熱も施設の整  
備促進に大きな力となつていますね。

佐野

今は、市民体育館、大麻体育館、青年センターと三カ  
所に屋内施設がありますから、利用される方も随分と便  
利になりましたね。道民スポーツ狩大会にしても、交  
通網の整備もあって、江別で全種目実施できるまでにな  
ったのですから、昔とは大違いです。

親が熱心なスポーツ少年団

司会

江別のスポーツのレベルは、全道的に見てどのような  
位置にあると考えられますか。

池田

私が事務局を担当した当初は、年間の予算が七万円



位でしたが、それが五、六年の間に八十五万円位まで大きくなりましたので、スポーツ少年団の育成と、表彰制度、事務局体制の整備に努めたのですが、スポーツ少年団は飛躍的に技術が向上しておりますので、全道的にも上位にランクされてきたのではないのでしょうか。

泉

池田さんがおっしゃるとおり、補導会から育成会と名称を変更したのが四十年代ですが、この頃から、少年のスポーツが盛んになりましたね。

高橋

指導者の少ないことが問題になっていきます。そのことが技術の向上につながっていないようです。競技人口は年々増えていくのですが、体力作りや健康の面で参加するというのが多いため、記録や技術面は一步遅れてしまっていますね。

小島

野球なども単位職場チームの登録制なものですから、個人々人について見ると優秀な選手も沢山いるのですが、オール江別形式でチーム編成ができれば全道的にも通じると思いますよ。

七戸

しかし、柔道の少年女子の部は全道的にも、全国的にも優秀な選手が出て伸びてきましたね。水泳も期待できますね。剣道はもう一步というところですか。

高柳

プレーをするための服装も技術面ではマイナスになっていますよ。例えば相撲の場合、子供達はパンツの上に「まわし」をつける。そうすると手がどこへでも掛ってしまうから、技ではなく力で倒すことになる。これではダメなのでですね。やはりきちっとした形が必要ですし、そのことが技術面で伸びていく訳です。

泉

少年団は、本人より両親の方が熱心なのはびくつきりしますね。これもやはり、ママさんのスポーツ熱が高まってきたことの表われですね。

佐野

親が熱心なのは結構なのですが、遠征なんかに行くとなると、バスをチャーターして貸切りですから、費用の

面でも大変でしょう。子供が選手として出場することは親としての楽しみでもあり、また誇りなのでしょうが、やりすぎと言う感じがしないでもないですね。

池田

その点がむずかしいと思いますが、どこでその一線を引いて、やりすぎにならないようにするかということでしょう。

七戸

中学二年を過ぎると、親の方からスポーツを禁止してしまうのが最近の傾向です。受験勉強ということでしょうが、やつと伸びてきてこれからだという時期にぶつかると、本人にとっても可愛想です。ですから指導者にとっても、その伸びる年令と、指導との兼ね合いがむずかしいと思います。

佐野

私も齢でしょうかね。若いお母さん方の考え方について行けない点もあります。一流の選手に育てたいという面を持つているながら、他面では、健康作りということやらせているから、子供達も、まあまあということでも妥協してしまおう。昔の育て方と違ってきているので指導も大変でしょう。

それと、子供達のスポーツの場が、母親のレクリエーションの場になつてきていて、終つたあとはダンスパーティーになつたりしています。

(一同大笑い)

高柳

練習にしても、二時間なら二時間ということ徹底的にやるのが無くなつてきました。一汗かいたら、今日は終りという事で帰ってしまうのが今のスポーツ選手全般に共通しているのではないのでしょうか。

小島

野球も指導者がちよつとやり過ぎると、すぐ出場辞退になつたりしますし、昔は強くするためには、指導者も泣いたものですが、今は選手の方が泣き出すから大変でしょう。(大笑い)

司会 ところで、今日出席の皆さんは体協の運営に長い間戻されてきた方々ですが、体協運営上で苦勞された点といえますと、どのようなことでしょうか。

佐野 苦勞といっても好きでやってきた道ですから、あまり大げさなものではありませんが、やはり何と言っても施設面でしょう。弓道などは場所がないのが一番の悩みでしたし、テニスコートにしても何んとか年次的に造成してきたのが、今につながっています。市民会館と体育館の建設をどちらを先にやるかということも問題でした。結果的には、あとで体育館が今の場所に建設されて良かったのでしよう。

泉 佐野さんと同じですが、スポーツ人口の増加と施設の整備が正比例しないのが実情でしょうから、育成会にしても会場選定が悩みですね。少年野球にはもともと市営球場を解放してくれるような形になればと思います。

池田 スケートなども、個人競技でありながら、伸びてこないというのは、施設面での問題があるからなのでしょう。将来道立総合運動公園が地元でできたとしても、市民がいつでも使用できる施設にはならないでしょうから、市としての総合スポーツ施設が必要でしょうね。また、体協として以前から問題となっていた道外派遣のことも、またスポーツ貢献賞なども懸案事項ですから、このことも合せて検討して行く必要があります。

小島 施設の不足も問題でしょうが、既存の施設も整備しなおす必要があります。中学校の校庭なども、もつと整備すれば充分活用できると思いますし、少年野球にも使えるのではないかと思います。

高橋 やはり施設の整備が、長い体協の歴史の中で一番の悩みでしたし、今後もスポーツ振興策となれば、他にも色々問題はかかえてきたと思います。第一に施設ということになりそうですね。

池田 それと、指導者の配置のこともあります。将来のこと

を考えながら、小中学校の教員の中に専門スポーツが指導できる方を異動の際考慮するなど行政サイドの協力を得ていくことも必要でしょう。

### Ⅱ ボランティアの力が大きな要素Ⅱ

司会 将来結成される見込みのある単位スポーツ団体と、青少年育成の見通しはどうでしょうか。

佐野 最近は一輪車が流行していますから、このことが引きがねになって自転車などはどうでしょうか。

泉 将来色々なスポーツ団体が結成されることは予測できますが、これら団体を養成して行く分野がむずかしいと思います。誰がイニシャティブを取っていくのか問題となるのではないのでしょうか。

池田 泉さんのお話しは、確かにそのとおりだと思いますが、体協として全市のなスポーツの流れや、競技人口などを把握して、相談に応じることと、やはり体協が積極的に働きかけて結成の方向付けをしてやるのが、今後の課題にもなるでしょう。

七戸 サッカーなども、盛り上ってきていますから、近いうちにできるでしょう。

高橋 原始林なども活用して、クロスカウントリーなども可能だと思います。道立総合運動公園に出来る施設によっては、大きく変って行くのではないのでしょうか。

小島 ソフトボールも江別市農協チームが全道的にも強いのですが、一チームしかないということが協会まで発展して行かないんですね。

佐野 先程池田さんがおっしゃった通り、学校の先生方に専門家が配置されることが必要ですね。それと、その先生方が少し「馬鹿」になる位になって指導していただかないと、なかなか新しい種目も普及しませんし、全体的に伸びてこないと思います。私達のような「スポーツ馬鹿」

が必要でしょう。(一同大笑い) 私など、学生の頃はカバンの中にはスポーツの本しか入っていないかったですよ。

七戸 スポーツ団体が増えることは、大変うれしいことです。これが同時にスポーツのマナーも指導して行く必要があります。最近には特にマナーが悪くなつてきています。跡片付けも満足にできないというのでは困りますよ。

高柳 道具を無くしても別に気にしないということもありま  
す。無くしても親がすぐ買つてくれるというんです。こ  
ういった点も指導していく必要があります。物を大切に  
しようとする気持ちがないですね。昔は、野球のボー  
ルなど家に持ち帰つて縫つたものですね。

泉 青少年育成の方向づけとなるとむずかしい問題が多い  
訳ですが、一般的に言えることは、今の子供達は体力が  
ないということですね。例えば放課後ドッチボールでも  
良いでしょうし、色々なスポーツを通じて体力を養うこ  
とが必要でしょう。非行の問題についても、スポーツに  
熱中させることで随分と少なくなると思っています。一つに  
打込む姿勢を崩りが作り出してやるのが、青少年の健  
全育成とスポーツ底辺の拡大につながって行くと考えま  
すね。

池田 私も外国へ行つたとき感じたことですが、小さいとき  
からの躰が日本と違いますね。マナーの問題にしても、  
一つのものに熱中して行く姿勢にしても大変厳しいやり  
方をしています。それと、地域のスポーツに対する考え  
方が違います。警察署長さんや、消防士さんが午後五時  
頃から広場に集つて子供達と一語になつてスポーツをし  
ている。こんな形が日本でも広まつて行くこと、つまり  
ボランティアの活動が大きな根になっているということ  
が痛感させられますね。

親が熱心なだけではだめなのです。私もこんなことを言つて  
も行動としては伴わない面があると思ひますが……(笑い)

司会 色々なお話しができましたが、最後に今後のスポーツの  
振興や、体協に対して望む点などをお聞きし、この座談  
会を終らせていただきたいと思います。

高柳 スポーツもやはり勝負の世界ですから、勝つことに対  
する真剣さが必要だと思ひます。そのためには、真剣に  
スポーツに打ち込む時間を家庭全体の中で考え、互に興  
味を持つことが大切ですし、指導に当る方も、この点を  
考えて老若男女、こぞつてスポーツに情熱を傾けるよう  
指導してくれることを期待しています。

佐野 八団体からスタートした体協が、三十年の歴史の中  
でここまで大きく発展してきましたが、今後も体協の基本的な在  
り方を皆んなで考え、市民体育の中核機関として大きく  
飛躍することを祈念しています。

泉 将来のスポーツの基礎となる青少年達を指導養成する  
ことが必要でしょう。そのためには行政の力も大きいと  
思ひますが、体協自らがボランティアとして、青少年  
にスポーツを身に付けさせるよう努力して欲しいと思ひ  
ます。

小島 昔と違つて、空地や公園で簡単にスポーツをやるとい  
う時代ではなくなつてきています。やはりそれぞれ  
の年代に即した施設面の整備・充実が必要であると思ひます  
し、将来を担う青少年の健全育成のため、体協独自の事  
業や、施策が望まれると考えます。

高橋 体協三十年の流れの中には色々なことがありましたが、  
単位協会もそれぞれの分野で選手の養成に当つてきまし  
た。今後大勢の方が参加しながら体協を大きく育てて  
行くことと思ひますが、小中学校の先生方との懇談など  
も年に数回は必要でしょうし、その中で体協の方向付け  
を打ち出すことも、また必要と思ひます。

池田 六十四年の国体を目指し、また、十万都市へ向けての体協の  
基盤整備と施設面の充実を図り、都市施設の型態を整え  
て行く必要があります。施設の有効活用では夜間照明な

どが考えられますし、体協の強化のためには、財政面で  
独立することが望まれます。

七声

皆さんがおっしゃるとおり、体協は色々な隘路がある  
中で三十年を経過してきましたが、やはり、指導者の養  
成、施設の整備、体協の組織・基盤の強化を図り、将来  
に向けてのスポーツ都市へ大きく発展して欲しいと思  
います。

（昭和五十五年十月十日）

市民体育館会議室において

栄誉に輝く人々

栄 誉

昭和48年度

団 体

江別高等学校  
陸上競技班  
野幌機農高校  
陸上競技部  
江別市役所  
剣道部  
北日本製紙  
柔道部  
江別高等学校  
バドミントン班

個 人

佐野 重 亀 猛  
福本 重 吉  
阿部 梅 吉  
大塚 豊 毅  
今井 毅 雄  
清水 重 雄  
丸山 武 敏  
山北 修 敏  
木村 敏 男  
片岸 性 喜  
この年度は、協会創立当初から48年度に至る間の功労者、団体に  
対して、まとめて表彰したものである。以下年度を追って列記  
する。

年 度 氏 名 推薦団体 表彰内容

昭和46年 対馬 英二 軟式庭球連盟 功労表彰

大森 明 柔道連盟 " " "

山須田 清一 野球連盟 " " "

野幌剣道愛好会 剣道連盟 " " "

昭和47年 勝田 太市 軟式庭球連盟 功労表彰

秋山 勇 野球連盟 功労表彰

江別市役所 功労表彰

バドミントン部 功労表彰

王子製紙剣道部 功労表彰

倉島 繁 功労表彰

昭和48年 村谷 清吉 功労表彰

北城 鉄雄 功労表彰

小塚 栄四郎 功労表彰

佐藤 多喜治 功労表彰

昭和49年 該当者なし

昭和50年 今野 昭男 功労表彰

小島 昭次 功労表彰

青田 安雄 功労表彰

北海道女子短大 功労表彰

卓球部 功労表彰

昭和51年 池永 和親 功労表彰

矢田 巖 功労表彰

井上 庸 功労表彰

高橋 行雄 功労表彰

昭和52年 甲斐 六郎 功労表彰

(故) 桑原 茂雄 功労表彰

(故) 加藤 敏雄 功労表彰

池田 春次 功労表彰

(故) 佐藤 憲次 功労表彰

松崎 善吉 功労表彰

昭和53年 小林 一男 功労表彰

昭和55年(協会創立30年特別表彰)

昭和54年

(故)

- 中川三男 軟式庭球連盟
- 恒遠一男 陸上競技協会
- 加賀谷喜八 柔道連盟
- 七戸君雄 剣道連盟
- 三本清作 " "
- 武井孝孝 軟式庭球連盟
- 藤井清左門 野球連盟
- 太田英一 卓球連盟

功勞表彰

功勞表彰

優秀選手賞

特別功勞表彰

- 岩田政勝 体育協会
- 泉重陽 " "
- 清水重雄 " "
- 佐野猛 " "
- 古田薫 " "
- 池田春男 " "
- 高橋豊雄 " "
- 伊藤清彦 " "
- 政田政一 " "
- 倉島繁 " "
- 丸山武敏 " "
- 伊藤藤辰 柔道連盟
- 岡藤英辰 剣道連盟
- 片岸性喜 野球連盟
- 小島昭一 " "
- 工藤豊次 " "
- 小林一男 " "
- 阿部梅吉 卓球連盟
- 高橋行雄 軟式庭球連盟
- 高柳武治 陸上競技協会
- 桑野健治 相撲連盟
- バレーボール協会

昭和55年

- 徳永健児 剣道連盟
- 竹田勝 " "
- 田辺昭雄 柔道連盟
- 新岡好栄 軟式庭球連盟
- 児玉末治 野球連盟
- 五十嵐悦治 " "
- 越田正晴 水泳協会
- 横田勝弥 " "
- 木村敏男 バドミントン協会
- 高野美千子 " "
- 北村美幸 水泳協会
- 莊司真美子 柔道連盟
- 渡部五月 " "
- 小野博史 陸上競技協会
- 江別市役所 " "
- バレーボールチーム " "

功勞表彰

優秀選手賞

優秀団体

歴代役員

40年	39年	38年	37年	36年	35年	34年	33年	32年	31年	30年	29年	28年	27年	26年	昭和25年	年次	
岩田政勝	福本重亀	福本重亀	高橋豊雄	高橋豊雄	高橋豊雄	福本重亀	福本重亀	福本重亀	福本重亀	福本重亀	岩田政勝	岩田政勝	岩田政勝	岩田政勝	岩田政勝	岩田政勝	会長
泉重陽	清水重雄	清水重雄	清水重雄	芦屋一三	福本重亀	佐野猛	佐野猛	佐野猛	佐野猛	佐野猛	江草信道	三浦光三	江草信道	三浦光三	江草信道	三浦光三	副会長
阿部梅吉	佐野猛	佐野猛	佐野猛	佐野猛	片岸性喜	片岸性喜	片岸性喜	片岸性喜	片岸性喜	片岸性喜	佐野猛	佐野猛	佐野猛	佐野猛	佐野猛	佐野猛	理事長
																	事務局長

	50年	49年	48年	47年	46年	45年	44年	43年	42年	41年	
	岩田政勝	岩田政勝	岩田政勝	岩田政勝	岩田政勝	岩田政勝	岩田政勝	岩田政勝	岩田政勝	岩田政勝	
	清水重雄	佐野猛	泉重陽	清水重雄	佐野猛	泉重陽	清水重雄	佐野猛	泉重陽	清水重雄	佐野猛
	伊藤清彦	伊藤清彦	伊藤清彦	伊藤清彦	伊藤清彦	伊藤清彦	伊藤清彦	伊藤清彦	阿部梅吉	阿部梅吉	阿部梅吉
	飯田哲雄	飯田哲雄	池田春男	池田春男	池田春男	池田春男	池田春男	池田春男	池田春男	池田春男	



55年	54年	53年	52年	51年
岩田 政勝	岩田 政勝	岩田 政勝	岩田 政勝	岩田 政勝
佐野 泉 清水 重陽 重雄	佐野 泉 清水 重陽 重雄	伊藤 佐野 泉 清水 清彦 重陽 重雄	伊藤 佐野 泉 清水 清彦 重陽 重雄	佐野 泉 重陽 重雄
七戸 君雄	七戸 君雄	政田 政一	政田 政一	伊藤 清彦
岩淵 威雄	政田 政一	政田 後期 渡辺 前期 政一 登	渡辺 登	飯田 哲雄

江別市体育協会役員名簿（昭和五五年度）

会長

岩田 政勝

清水 重雄

泉 重陽

副会長

佐野 猛

七戸 君雄

西沢 良夫

五十嵐 悦治

小野沢 秀晃

最上 光弘

服部 実

杉本 亮二

中内 良朗

大森 明

中山 満

笹岡 武雄

大郷 正裕

音部 憲夫

監事

久慈 正徳

古屋 清美

小林 一男

池田 春男

鷺田 三郎

川崎 満

木村 敏男

多田 孝雄

中村 敏雄

高橋 省一

根本 敏明

鈴木 四郎

松井 礼二郎

（剣道連盟）

（バドミントン協会）

（野球連盟）

（庭球連盟ハ軟式）

（陸上競技協会）

（卓球連盟）

（バレーボール協会）

（バスケットボール協会）

（柔道連盟）

（相撲連盟）

（弓道連盟）

（水泳協会）

（空手道連盟）

（スキー連盟）

（庭球連盟ハ硬式）

（剣道連盟）

（バドミントン協会）

（野球連盟）

（庭球連盟ハ軟式）

（陸上競技協会）

事務局長

飯田 敏光

同 次長

太田 英一

同 局長

吉川 敬造

嶋倉 昭

納谷 和行

海上 修

久司 敏夫

今野 昭男

吉川 賢司

佐藤 良夫

高木 定義

前田 孝

山中 隆八郎

佐藤 昭彦

大野 聡

菅原 晴隆

安藤 裕美

山崎 由晴

小玉 豊治

稲垣 良平

柴田 省二

岩淵 威雄

中川 正志

一柳 さつき

（陸上競技協会）

（卓球連盟）

（バレーボール協会）

（バスケットボール協会）

（柔道連盟）

（相撲連盟）

（弓道連盟）

（水泳協会）

（空手道連盟）

（スキー連盟）

（庭球連盟ハ硬式）

市内体育施設の現況

1 屋外体育施設

(1) 飛鳥山公園 (所在地 緑町西2丁目11番地)

野球場

昭和27年設置

総面積 一万七〇〇〇<sup>2</sup>m

両翼 八八<sup>2</sup>m

中堅 一一〇<sup>2</sup>m

役員本部席・スコアボード・SBCランプ

用具庫

収容人員 三〇〇〇人

陸上競技場

昭和27年設置

総面積 二万六五〇〇<sup>2</sup>m

一周 四〇〇<sup>2</sup>m

三種公認

用具庫

収容人員 七〇〇〇人

テニスコート

昭和54年10月設置

全天候 二面

クレイ 二面

役員席・ロッカー室・用具庫

(2) 市民体育館

(詳細 屋内体育館の欄参照)

(3) 大麻東公園

(所在地 大麻東町35番地)

テニスコート 昭和48年11月設置

クレイ 一面

総面積 五九四<sup>2</sup>m

(4) 大麻西公園 (所在地 大麻沢町27番地)

テニスコート 昭和42年9月設置

クレイ 二面

総面積 一五二〇<sup>2</sup>m

(5) 石狩川河川敷 (所在地 工栄町)

野球場 昭和51年10月設置

二面 三万一〇〇〇<sup>2</sup>m

(6) 冬季特設スケートリンク

飛鳥山 一周 二六〇<sup>2</sup>m

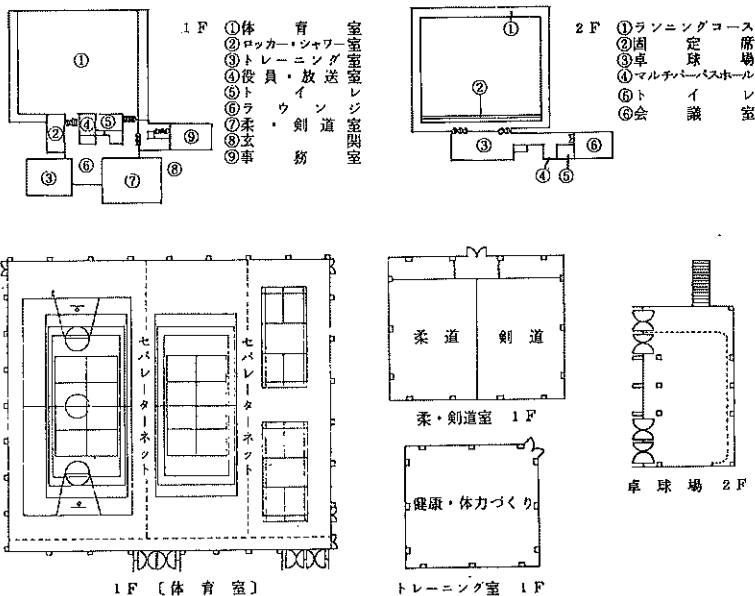
野幌代々木町 一周 二〇〇<sup>2</sup>m

大麻宮町 一周 二〇〇<sup>2</sup>m

2 屋内施設

市民体育館

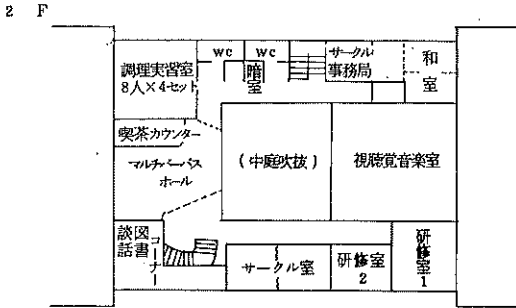
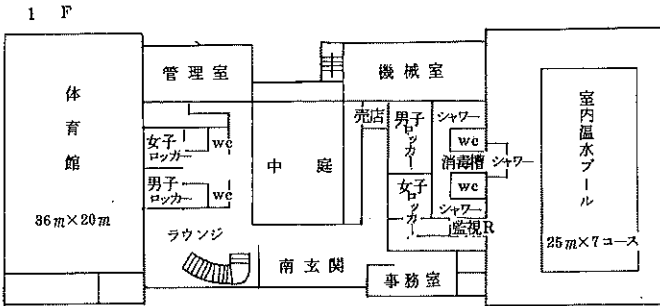
(所在地)	江別市野幌町9番地	(オープン)	昭和53年5月21日
(敷地)	16,472 $m^2$	(規模)	建築面積 380,699.6 $m^2$
(構造)	鉄筋コンクリート造・鉄骨鉄筋コンクリート造・上部鉄骨造・(屋根)・一部2階建		床面積 1F 357,885.2 $m^2$ 2F 188,326 $m^2$ 合計 496,217.8 $m^2$
(主な施設)	体育室 44×88.05+27.098 1701.298 $m^2$ (バスケットボール2面) (卓球18台)(バレーボール2面) (テニス2面) (バドミントン8面)		
	柔・剣道室 22×15+14.285 344.285 $m^2$		
	器具室 48.901 $m^2$		
	会議室 14.65×9 131.850 $m^2$		
	マルチパーパスホール 26.988 $m^2$		
	ロッカー室 男女別 27.926 $m^2$		
	事務室 8.8650 $m^2$		
	休息室 21.587 $m^2$		
	器具室 235.192 $m^2$		
	トレーニング室 16.5×14+1.739 229.261 $m^2$		
	卓球場 19.425×9+38.5 213.325 $m^2$		
	ラウンジ 11×10+3.478 113.478 $m^2$		
	役員・放送室 51.433 $m^2$		
	シャワー室 男女別 13.196 $m^2$		
	応接室 15.540 $m^2$		
	(駐車場 乗用92・バス3)		
(屋外施設)	全天候性テニスコート2面 36.574×36.574 1337.657 $m^2$ 弓道場 23m近の6人立 相撲場 屋根・四本柱		
(主な設備)	球面反転式得点表示装置・I TV (体育室・柔・剣道室・トレーニング室・卓球場) ランニングコース		
(照度)	体育室 1,000ルクス 柔・剣道室・トレーニング室・卓球場 500ルクス		
(収容人員)	3,000人(固定席146、ロールバックスタンド439)		



青年センター

江別市緑町2丁目11

(建築構造) 鉄筋コンクリート2階建  
一部鉄骨造り  
(建築面積) 2,298.4 $m^2$ (740.4)  
(建築延面積) 3,357.8 $m^2$ (825.8)  
(敷地面積) 5,369 $m^2$ (1,855)  
(開館) 昭和47年1月22日  
(一部(体育館)開館) 46・7・1

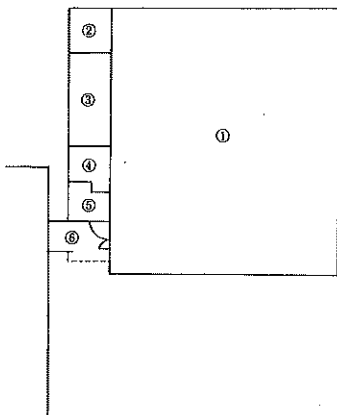


室名	面積	定員
温水プール	827 $m^2$	300人
体育館	720	
ラウンジ	119	40
シャワー室	82	
相談室	5	5
中庭	165	50

大麻体育館

- ① 体育室
- ② 機械室
- ③ 器具室
- ④ 男子更衣室
- ⑤ 女子更衣室
- ⑥ シャワー室

(所在地) 江別市大麻中町26番地17  
(敷地面積) 6,590.02 $m^2$   
(構造) 鉄骨ダイヤモンドトラス  
鉄筋コンクリート造、平屋建  
(規模) 建築面積 1,273.40 $m^2$   
床面積 1,172.50 $m^2$   
(施設) 体育室 34.5m x 30m 1,035.00 $m^2$   
バスケットボール 2面 バレーボール 2面  
バドミントン 6面 テニス 2面 卓球 10面  
更衣室(男女別) 22,125 $m^2$   
シャワー室(男女別) 800 $m^2$   
器具室 697.5 $m^2$   
機械室 175.0 $m^2$   
(照度) 体育館 600Lux  
(収容人員) 1,600人



江別市体育協会規約

(昭和36年9月15日制定)

目次

- 第1章 名称及び事務所
- 第2章 組織
- 第3章 目的及び事業
- 第4章 役員
- 第5章 事務局
- 第6章 会議
- 第7章 会計
- 第8章 補則
- 附則

第1章 名称及び事務所

第1条 本会は、江別市体育協会と称し、事務所を江別市教育委員会事務局内に置く。

第2章 組織

第2条 本会は、江別市内の体育団体で本会の趣旨に賛同するものをもって組織する。

第3条 本会の加盟団体は、別に定める加盟団体規程を守らなければならない。

第4条 本会に専門的事項を審議処理するため、専門部会を設けることができる。

第3章 目的及び事業

第5条 本会は、加盟団体の融和連絡を図り、北海道体育協会と連携し、市民体育の健全な普及発達と体位の向上に寄与することを目的とする。

第6条 本会は、前条の目的を達成するために、次の事業を行う。

- (1) 市民体育行事の連絡調整及び指導
- (2) 加盟団体に対する助成
- (3) 体位向上に関する方策の調査方法

- (4) スポーツ(体育思想)の啓蒙宣伝及び指導奨励
- (5) 体育施設の強化充実
- (6) 体育指導委員との連絡提携
- (7) 体育大会、講習会等体育に関する各種行事の実施及び援助
- (8) 江別市スポーツ少年団連絡協議会との連絡提携の中での育成指導
- (9) 体育功労表彰に関する事項
- (10) その他本会の目的達成に必要な事項

第7条 第4章 役員  
本会に次の役員を置く。

会長 1名

副会長 若干名

理事長 1名

常任理事 1名

理事 若干名

監事 2名

第8条 会長及び副会長は、総会において選出する。

2 会長は、本会を代表し、本規約の定めるところにより会務を総理する。

3 副会長は、会長を補佐し、会長事故あるときはその職務を代行する。

第9条 理事長及び副理事長は、理事の互選とする。

2 理事長は、会長の指示を受け会務を執行する。

第10条 3 理事長事故あるときは、副理事長がその職務を代行する。  
理事は、加盟団体より各々3名選出し、うち1名は常任理事とする。

2 理事は、会務を掌握し、常任理事は理事会の決定事項を執行する。

第11条 3 理事及び常任理事は、会長がこれを委嘱する。  
監事は、理事会において選出し、会長がこれを委嘱する。

第12条 2 監事は、本会の業務を監査し、会務運営の適正を期する。  
役員は、2年とする。

2 補充及び、補欠の役員は、前任者の残任期間とし、増員により就任した役員は、前任者の残任期間とする。

8 役員は、任期が満了しても、後任者が就任するまでは、その職務を行う。

4 役員の再任については、これを妨げない。

第13条 本会に總會の推せんにより、顧問を置くことができる。

第14条 顧問は、次に掲げる者のうちから会長がこれを委嘱する。

(1) 体育功労者

(2) 体育振興に関し、特別の識見を有するもの

(3) その他学識経験者

(4) 顧問は、重要事項に関し、会長の諮問に応ずる。

#### 第5章 事務局

第15条 本会の事務を処理するために事務局を置く。

第16条 事務局に関する規程は、別にこれを定める。

#### 第6章 会議

第17条 本会の会議は、總會及び常任理事会とする。

第18条 總會は、本会の決議機関で、次の事項を審議決定する。

(1) 予算、決算の承認

(2) 役員の変更

(3) 規約改正に関する事項

(4) 本会の事業に関する事項

(5) その他必要と認められた事項

第19条 總會は、会長がこれを招集する。

總會は、理事総数の過半数の出席をもって成立し、その議決は、出席者の過半数の賛同を要する。

2 可否同数の場合は、議長がこれを決する。

第20条 常任理事会は、会長、副会長、理事長、副理事長及び常任理事をもって構成し、總會の決定事項その他会務遂行上必要な事

項を審議執行する。

2 常任理事会は、会長がこれを招集し、統裁する。

#### 第7章 会計

第21条 本会の経費は、次に掲げるものをもってこれに充てる。

(1) 負担金

(2) 補助金

(3) 寄付金

(4) 雑収入

第22条 本会の会計年度は、毎年4月1日に始まり翌年3月31日に終る。

#### 第8章 補則

第23条 この規約の施行について必要な細則は、別にこれを定める。

#### 附則

この規約は、昭和36年9月15日から施行する。

#### 附則

この規約は、昭和38年5月1日から施行する。

#### 附則

この規約は、昭和40年6月8日から施行する。

#### 附則

この規約は、昭和43年4月10日から施行する。

#### 附則

この規約は、昭和50年7月30日から施行する。

#### 附則

この規約は、昭和52年4月25日から施行する。

江別市体育協会加盟団体規程 (昭和38年5月1日制定)

- 第1条 本会規約第3条により、加盟団体に関する規程を次のように定める。
- 第2条 加盟団体は、同一種目につき全市を統括代表する唯一のアマチュアスポーツ団体でなければならない。
- 第3条 加盟団体は、毎年度事業終了後1カ月以内にその年度の事業報告及び決算書を、またその年度の始めに事業計画及び予算書を提出しなければならない。
- 第4条 加盟団体は、毎年4月末日までに本会規約第21条による負担金を納付しなければならない。
- 2 負担金額は、年額五〇〇〇円とする。
- 第5条 加盟団体は、主要役員、規約、その他提出書類に変更があった場合は、直ちにその旨を届け出なければならない。
- 第6条 新たに加盟しようとする団体は、その代表者より次の書類を提出し、本会の常任理事会の承認を得なければならない。
- (1) 加盟申込書  
(2) 事務所所在地  
(3) 役員一覧表  
(4) 規約又は会則  
(5) 前年度事業概要  
(6) 当該年度事業概要  
(7) 当該年度予算書
- 第7条 加盟の承認を得た団体は、直ちに本会規約第21条による負担金を納付し、所定の役員を選出し、その氏名、住所、生年月日、及び職業(勤務先)を報告しなければならない。
- 第8条 加盟団体が脱退しようとする場合は、次の書類を提出し、常任理事会の承認を得なければならない。
- (1) 脱会届  
(2) 脱会理由書
- 第9条 一旦納付した負担金、拠出金その他の経費は、いかなる理由があつても返還しない。

附 則

この規程は、昭和38年5月1日から施行する。

附 則

この規程は、昭和49年5月10日から施行する。

附 則

この規程は、昭和51年5月28日から施行する。

江別市体育協会事務局規程 (昭和38年5月1日制定)

- 第1条 本会規約第16条の定めるところにより、事務局を置き本会に關する事務を取扱う。
- 第2条 事務局に次の職員を置く。
- (1) 事務局長 1名  
(2) 事務局次長 1名  
(3) 事務局職員 若干名
- 第3条 事務局長は、總會の承認を経て会長がこれを委嘱する。
- 2 事務局次長及び事務局職員は、事務局長が委嘱する。

附 則

この規程は、昭和38年5月1日から施行する。

附 則

この規程は、昭和49年5月10日から施行する。



江別市体育協会表彰規程（昭和44年5月14日制定）

2 基準

(1) 個人  
永年に亘り、江別市スポーツ界のため献身的努力を重ね、他の範となるもの、また、競技上優秀な成績を挙げ、スポーツ進展に特別寄与したものを。

(2) 団体  
スポーツ団体として、スポーツ精神の昂揚を図り、その実績顕著なもの、また、競技成績が抜群で江別市のスポーツ界に名譽をもたらしたものを。

(3) その他個人、団体として江別市スポーツ界に貢献し、その業績優秀にして、社会的価値が大であると認められたものを。

1 目的

江別市のスポーツ界に貢献することの顕著な団体又は個人を表彰することを目的とする。

2 表彰の範囲

表彰の範囲は、次の各号に該当するものとする。

- (1) スポーツのため献身的に尽力し、他の範となる団体又は個人
- (2) スポーツを通じ江別市の地域社会に貢献し、その功績が著しい団体又は個人

3 審査委員会

審査委員会を設け、表彰の範囲に該当するそれぞれの事項を審査する。

- (1) 審査委員は、会長が理事の中から委嘱する。
- (2) 委嘱された委員は、審査委員会を開き該当事項を審査する。
- (3) 審査された事項は、会長に答申する。

4 表彰の決定

表彰の決定は、別に定める表彰基準に基づき、次の順序を経て、会長が被表彰団体又は個人を決定する。

- 2 会長は、審査委員会の答申に基づき副会長及び理事長の意見を徴し決定する。

5 表彰の時期

表彰の時期については、別に定める。

附 則

この規程は、昭和44年5月14日から施行する。

表彰基準

1 表彰の根本方針

江別市体育協会表彰規程に照し、表彰に値するもの。

創立30年記念事業  
実行委員会委員名簿

実行委員長	岩田 政勝						
実行副委員長	清水 重雄	泉 重陽	佐野 猛	七戸 君雄			
総務委員長	岩淵 威雄						
総務委員	五十嵐悦治	小野沢秀晃	最上 光弘	服部 実			
	杉本 亮二	中内 良朗	大森 明	中山 満			
	笹岡 武雄	大郷 正裕	音部 憲夫	久慈 正徳			
	古屋 清美						
式典祝賀委員長	西沢 良夫						
式典祝賀委員	中山喜美雄	木村 敏男	中村 敏雄	根本 敏明			
	松井礼次郎	太田 英一	納谷 和行	管原 晴隆			
	久司 敏夫	今野 昭男	佐藤 良夫	前田 孝			
	佐藤 昭彦	山崎 由晴	柴田 省二				
記念誌委員長	中川 正志						
記念誌委員	鷲田 三郎	高橋 省一	鈴木 四郎	飯田 敏光			
	吉川 敬造	嶋倉 昭	安藤 裕美	海上 修			
	吉川 賢司	高木 定義	山中隆八郎	大野 聡			
	小玉 豊治	稲垣 良平					

編集後記

●木々の葉も散り、庭木の冬囲いも始まりました。冬將軍の訪れを待つウインタースポーツマンにとっては、これからが本番です。夏の間には鍛えた体力にものを言わせる季節の到来は、うれしい限りでしょう。

●江別市体育協会創立三十年の間には、色々な想い出や、エピソードが秘められています。故人とられた方もおりますでしょう。人生にたとえれば、体協は三十歳、これからが働き盛りです。

●この記念誌にご協力をいただいた皆さまには、どれだけ応え得る企画をしたか考えるとき、ただただ恥じ入るばかりです。今後の四十周年、五十周年の企画にご期待願うことといたします。

●市民待望の道立総合運動公園も決定し、今後のスポーツ振興に大きな役割を果たすでしょう。体協、単協それぞれに市民の皆さんが一層スポーツに情熱を傾けることを祈念し、明るる五十六年が良き年でありますように。

(M・N)

江別市体協三十年の歩み

昭和五十五年十一月十日 印刷  
昭和五十五年十一月十六日 発行

発行 江別市体育協会

発行責任者 岩田 政勝

印刷所 江別市野幌町

株式会社

清水印刷

